

先生方とともに
高校生の今と未来をつなぐ

〈ビュー21〉
高校版
2017
Volume 2

6月

VIEW21

チャンスは、この1年

特集

「学校教育デザイン」を描く①

これからの
学校教育目標のあり方

主体的・対話的で深い学びへ
実践 アクティブ・ラーニング

公民

石川県・国立金沢大学人間社会学域学校教育学類附属高校 前田健志

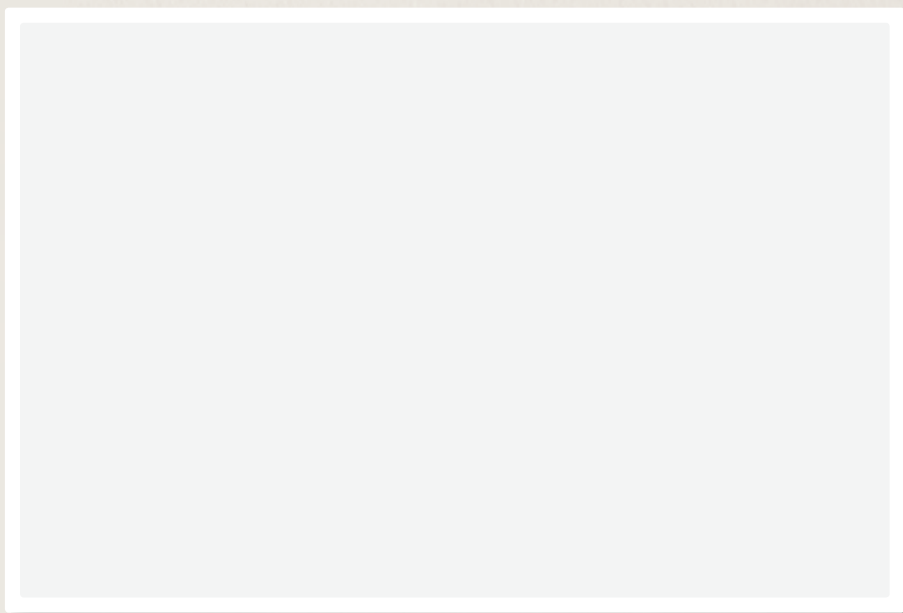
数学

大阪府・私立近畿大学附属高校・中学校 芝池宗克

指導変革の軌跡

石川県・私立おおとり鵬学園高校

大阪府立ひろかた枚方高校



「頑張り合い」が生まれたクラス

先生 みんな、いよいよ卒業だね。高校最後のクラスはどうだった？

生徒 私たちのクラスは団結力が強くて、体育大会などで好成績を収めてきましたし、ほかのクラスの人から「みんな仲がいいね」とよく言われていたんですよ！

先生 実際、とても明るいクラスで、先生も教室に行くのが毎日楽しみでした。体育大会や文化祭では、「自分たちでやると決めたことは、自分たちの責任でやり抜こう」という意識をみんなが持っていたから、先生はただ、頑張るみんなを見守る日々だったよ。

生徒 確かに先生から「こうしなさい」と指示されることはありませんでしたが、「これ、やってみたら？」とチャレンジを提案されることはよくありました。私の場合は、英語のスピーチ大会への出場です。内心、興味はあったけど、一步を踏み出せずにいました。でも、先生のひと言で大会に出て、それがきっかけで、いろいろなことに挑戦するようになったんですよ。

生徒 私は志望大学の相談をした時、想定外の高い目標を「力があるのだから、挑戦してみたら？」と勧められました。先生と話すうちに、「可能性があるなら

……」とやる気になったんです。その大学には合格できなかったけど、自分とは無縁だと思っていた未知の世界を垣間見られて、挑戦してよかったと思っています。

先生 若い君たちには、自分では気づいていないけど、先生だからこそ見えてくる可能性が秘められていると思うんです。その可能性に気づかないまま高校生活を終えるのはもったいないよね。生徒一人ひとり、可能性の種類は違うけど、それをちゃんと見つけて、伝えていくのも先生の仕事だと思っています。

生徒 普段は、私たち一人ひとりのことをじっくり見守りながら、くだらないおしゃべりの輪にも笑顔ですっと加わってくれる。高田先生は、「みんなの先生」であり、「私の先生」でした。先生がいなかったら、高校時代、いろいろなことにあれほど頑張れなかったかも……。 「頑張り」と言われたことはなかったけど、先生がいたからみんな頑張れたんだと思います。

先生 みんなが頑張る姿を見て、「よし、自分も頑張ろう」とパワーをもらっていました。だから本当に、みんなとの時間が楽しかったんだよ。先生からもみんなにお礼を言いたいです。ありがとう！

高田裕治先生 教職歴15年。同校に赴任して14年目。進路指導課長。

山口県・私立野田学園中学・高校 全日制/普通科/共学/1学年約300人/2017年度入試合格実績(現浪計) 国公立大は、大阪大、山口大、九州大などに67人が合格。私立大は、同志社大、立命館大、関西大、関西学院大などに延べ243人が合格。

2 特集

「学校教育デザイン」を描く①

これからの 学校教育目標のあり方

- 4 次の学校を創るための学校教育デザイン
- 8 「学校教育デザイン」の第一歩、学校教育目標の策定
- 10 実践事例1
教育活動全般で育む資質・能力を明示し、
生徒に高い自己肯定感を醸成する
山梨県立吉田高校
- 14 実践事例2
教育スローガンを掲げ、学校内外への浸透を図ることで、
目指す学校像を実現する
埼玉県立宮代高校

今月の表紙メッセージ

チャンスは、この1年

◎5月に文部科学省から「高大接続改革の進捗状況について」が発表され、改革の着実な推進を実感された先生も多いと思います。高校教育は、2020年度の「大学入学共通テスト（仮称）」、22年度の新学習指導要領の実施と、大きな変化が続きます。新しいテストを受験することになる生徒が入学する18年度まであと1年。実はこの1年が、次の自校の姿を学校全体で腰を据えて考えられる重要な期間となります。そこで、弊誌では今号から4号にわたり、次の自校を創るための「学校教育デザイン」と、それを描くために必要な視点や具体策を発信していきます。ご期待ください。

『VIEW21』高校版
編集長 柏木 崇

18 「探究学習」開発・推進 追跡レポート

探究学習・ALを検討する中で、
これからの教育という問いを立てる

20 主体的・対話的で深い学びへ 実践 アクティブ・ラーニング

20 公民

石川県・国立金沢大学人間社会学域学校教育学類
附属高校 前田健志
生徒に絶えず問いかけて発言をつなぐことで議論を活性化し、
教室全体で思考を深めていく

24 数学

大阪府・私立近畿大学附属高校・中学校 芝池宗克
生徒自身が作った問題の解説を通して議論を深め、
真の理解と協働する力の育成を目指す

28 指導変革の軌跡

石川県・私立 鵬 学園高校
基礎学力向上

組織的な授業改善とICTの効果的な活用で、
学びに向かう生徒を育成

32 大阪府立枚方高校
進路指導・大学入試改革への対応

3年間を見通した指導で、
生徒の学習習慣の定着と進路意識の向上を図る

36 改良！ 指導ツール ビフォーアフター

3年生 夏休み前
弱点克服シート

40 大学生による高校生のための 大学の学び 最新ナビ

40 専修大学 ネットワーク情報学部
実践的な問題解決を通して、
実社会で求められるスキルを段階的に学ぶ

42 就実大学 経営学部
4か月間のインターンシップ・留学を経験させ、
学び・考え続ける力を育む

44 これからの会議・研修のあり方、つくり方
自由な対話の場をつくる方法

46 VIEW'S REPORT

2018年4月、横浜市立大学に学部新設予定
ビッグデータ時代に注目の学問
「データサイエンス」とは？

50 特別レポート

「SGH甲子園2017」開催！
全国から84校が参加し、情熱をかけた研究の成果を発表

68 Reader's VIEW

巻末 教師を育てた言葉たち

「教育は人づくり。人づくりには時間がかかる」
兵庫県立播磨農業高校 丸山正人

<http://berd.benesse.jp>

本誌記事は、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでもご覧いただけます
印刷製本／(株)協同プレス 編集協力／(有)ベンダコ 執筆協力／中丸満、二宮良太 撮影協力／荒川潤、川上一生、谷口哲、藤木潤一、ヤマグチイッキ
*本文中のプロフィールはすべて取材時のものです。また、敬称略とさせていただきます
*本誌記載の記事、写真の無断複写、複製及び転載を禁じます
©Benesse Corporation 2017

「学校教育デザイン」を描く①

これからの 学校教育目標の あり方

高校教育は、2020年度に現在のセンター試験に替わる「大学入学共通テスト（仮称）」の実施、
2022年度からは新学習指導要領が年次進行により実施と、大きな変化が続く。

今後、育成が求められるのは、各教科等の知識だけではなく、
その知識を活用しながら思考・判断・表現する力や、

そのような力を身につけるために学びに向かう力といった、資質・能力だ。

自校では、生徒にどのような資質・能力を育み、どのような教育課程を策定して、指導改善を図っていくのか、
その一連の過程をカリキュラム・マネジメントを通じて考え、実践することが、学校、教師に求められる。

本誌では、それを「学校教育デザイン」と名づけ、

その構築の提言と実現のポイントを4号にわたって発信していく。

1回目の今号では、「学校教育デザイン」とは何か、

そして、その構築の第一歩である、学校教育目標のあり方について考える。



みやしろ
埼玉県立宮代高校



山梨県立吉田高校

激変する社会環境・教育環境

- ◎AI（人工知能）の進化等による自動化・機械化、グローバル化、少子高齢化等の社会環境の急速な変化
- ◎それに伴う教育改革・入試改革の進展（2020年度「大学入学共通テスト（仮称）」の実施、2022年度からの新学習指導要領の実施）



学校教育に求められるのは、
これからの時代に必要となる**資質・能力の明確化**と、
それを育成する**指導の確立**

2020年度・22年度に向けて学校全体で今から取り組んでおきたいこと

【P.4～7】

- ① 学校教育目標（生徒に育む資質・能力）の確認と見直し、共有・浸透
- ② 育成を目指す資質・能力との関係を明確化した**カリキュラム（教育課程）**・指導計画の作成
- ③ 教育課程・指導計画に基づいた**授業・指導の実践**
- ④ 授業・指導の**評価・検証**
- ⑤ 評価・検証結果に基づいた**授業・指導の改善**

「カリキュラム・マネジメント」を通じて、①～⑤のプロセスに繰り返し取り組む



この営みを「**学校教育デザイン**」と名づけ、4号にわたって、
それを描くために必要な視点や具体的方策を発信

「学校教育デザイン」を描くための第1ステップ

学校教育目標の確認と見直し、共有・浸透

求められる視点

【P.8～9】

学校教育目標（生徒に育む資質・能力）は、

- ◎学習指導要領を受け止めつつ、校訓・校是、建学の精神、学校や地域が創り上げてきた文化（校風）など、教育の根幹である「不易」の視点と、社会の変化や地域の実情、生徒の姿といった「流行」の視点を踏まえて策定する。
- ◎管理職などの一部の教師だけでなく、全教師がかかわりながら策定し、それを学校全体はもちろん、地域や保護者とも共有する。また、多くの人共感するようなメッセージ性を持ち、かつ、具体的で分かりやすい文言にする。さらに、策定した後も、生徒や地域、社会の変化を受け止めた不断の見直しが必要となる。

実践事例

山梨県立吉田高校 【P.10～13】

教育活動全般で育む
資質・能力を明示し、
生徒に高い自己肯定感を醸成する

埼玉県立宮代高校^{みやしろ} 【P.14～17】

教育スローガンを掲げ、
学校内外への浸透を図ることで、
目指す学校像を実現する

次の学校を創るための 学校教育デザイン

高校現場は今、大きな変化の真ただちにある。大学入試改革、次期学習指導要領、そして生徒たちが生きる社会——すべてが密接につながり、さらに大きな変化が生まれつつあるこの時を、次代の要請に応える学校改革のチャンスとすることが求められている。

そこで弊誌では、各学校が積み重ねてきた成果、伝統を土台にしながら、

自ら未来を切り拓き、家庭や地域、世界の期待に沿える人材を育てる次の学校づくりの視点を

「学校教育デザイン」と名づけ、今後4号にわたって、その具体を読者の先生方とともに考えていく。

自校を再構築する

「学校教育デザイン」

AI（人工知能）の発達やIoT（*1）の実現などの技術革新の影響により、今後10～20年間で職業のあり方が変化することが予測されるなど（図1）、以前は想像もしなかった姿に社会が変わろうとしている。そして、今後も、予測困難な変化を社会は遂げていくと考えられる。

そのような社会を生きる生徒が未来を切り拓いていけるよう、学校教育において育成を目指す資質・能力が、次期学習指導要領において明確

化されることになった。それはすなわち、「生きて働く知識・技能」「未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力」「学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力・人間性等」だ（図2）。

それらの資質・能力は、これまでの学校教育で育成してきた力とは異なる、全く新しい力というものではない。ただ、これまでは「何を学ぶか」という、学習内容（コンテンツ）に注目がいきがちであったが、これからは、それを学ぶことで「何ができるようになるか」、すなわち、資質・能力（コンピテンシー）の育成とい

う視点で、教育活動を営んでいく必要がある。

そして、資質・能力を育成するために必要なのが、「主体的・対話的で深い学び」の実現だ。その「主体的・対話的で深い学び」も全く新しい学びではなく、これまで多くの学校・教師がその実現のために様々な工夫をしてきた。つまり、これらの学校に求められるのは、これまで積み上げてきた取り組みとその成果を振り返りながら、変化する社会の文脈の中で、育成すべき資質・能力やそれを育む学び・指導を捉え直したり、整理したりすることである。

図1 今後の職業のあり方に関する予測

2011年にアメリカの小学校に入学した子どもたちの65%は、大学卒業後、今は存在していない職業に就くだろう。

—— ニューヨーク市立大学大学院センター教授キャシー・デビッドソン氏

今後10年～20年程度で、半数近くの仕事が自動化される可能性が高い。

—— オックスフォード大学准教授マイケル・オズボーン氏

2045年には人工知能が人類を越える『シンギュラリティ』に到達する。

—— アメリカ人発明家レイ・カーツワイル氏

*1 Internet of Things の略。スマートフォンやパソコンだけでなく、様々な物に通信機能を持たせ、インターネットに接続したり、相互に通信したりして、自動制御や情報収集などを行うこと。

ただ、教育活動の捉え直しは、ゼロベースからではないとは言え、一朝一夕でできることではない。高校教育は、2020年度に「大学入学共通テスト（仮称）」の実施、22年度に新学習指導要領の実施と、大きな変化が続く（P.6図3）。そのため、「大学入学共通テスト（仮称）」を受験する生徒が入学する18年度までのこの1年間は、自校はどのような資質・能力を生徒に育み、どのような教育課程や指導計画を策定して、どのように授業や評価方法を改善するのかを学校全体で考えられる重要な機会と言える。

そこで弊誌では、学校教育目標から教育課程・指導計画の策定、授業改善・評価方法の確立とその実践・検証までの一連のサイクルが、カリキュラム・マネジメントを通じて実現されるものを「学校教育デザイン」と名づけ、その実現のポイントを、今号から4号にわたって展開していく（P.7図4）。

答申と現場の声を基に描く5つのデザインプロセス

では、「学校教育デザイン」はど

のように進めていけばよいのだろうか。16年12月に中央教育審議会から公表された「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（以下、答申）と現場の高校教師へのヒアリングを基に、弊誌では「学校教育デザイン」を描くプロセスを、次の5つのステップに整理した。

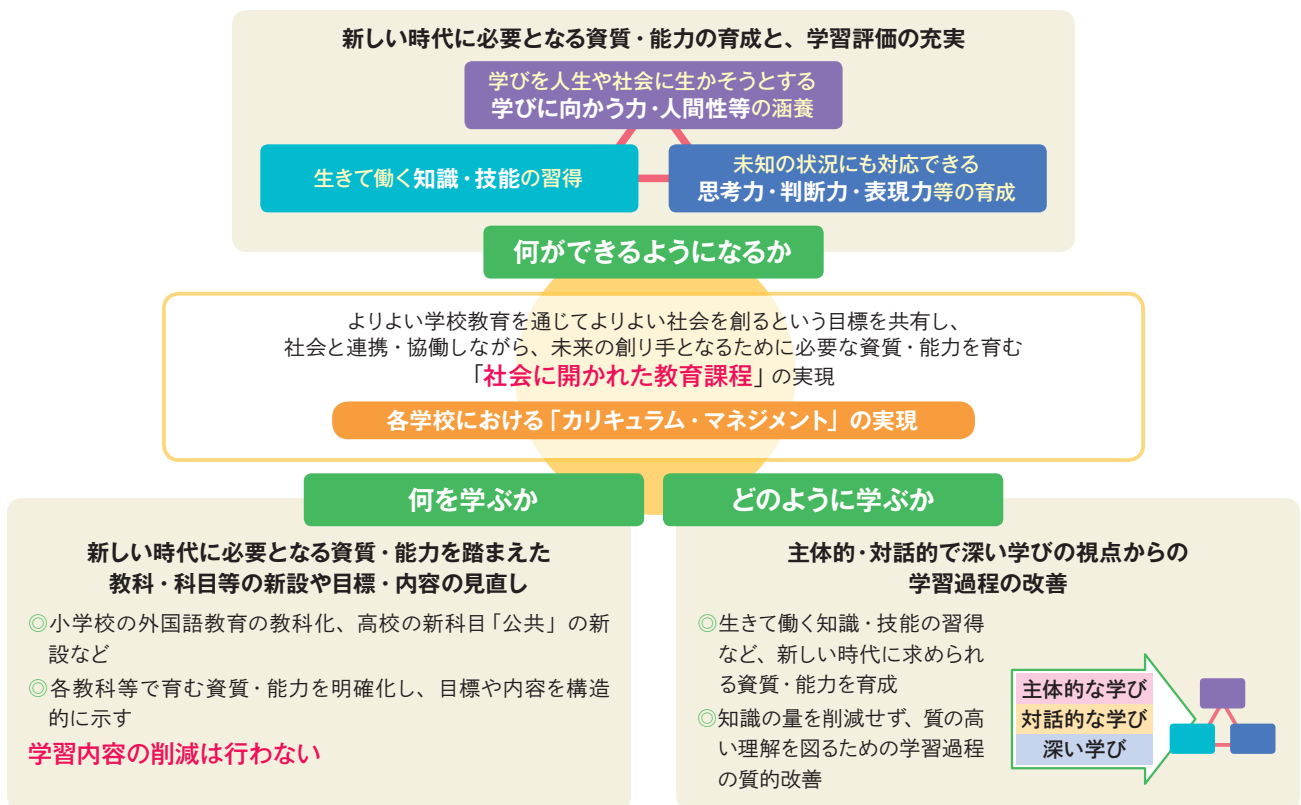
① 学校教育目標

「学校教育デザイン」の最も重要な要素であり、学校教育目標の策定こそが、「学校教育デザイン」構築の第一歩となる。自校の生徒に、どのような資質・能力を育むのかを明確化することが求められる（詳細は、P.8～9）。

② カリキュラム（教育課程）・指導計画

一般的に、各学年でどのような教科・科目をそれぞれ何単位で履修させるのかを表形式で示したものがカリキュラム（教育課程）である。これからは、「何を学ぶか」だけではなく、それを学ぶことで「何ができるようになるか」、すなわち、「自校で育成を目指す資質・能力」＝「学校教育目標」とのつながりを明確化したカリキュラム（教育課程）が求めら

図2 学習指導要領改訂の方向性



*中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」を基に編集部で作成

図3 高校および大学入試にかかわる教育動向



れる。そして、カリキュラム(教育課程)に基づき、教師がいつ、誰に、何のために、どのような指導をどのように行うのかを示した指導計画を策定するのが、「学校教育デザイン」の第2ステップとなる。

3 授業・指導実践

カリキュラム(教育課程)・指導計画に基づいて、教科の授業を始めとする各教育活動を実践することとなる。その時に求められるのが、各教育活動の目標(資質・能力の育成)を達成するための「主体的・対話的で深い学び」だ。単元や題材のましまりの中でそれを実現できるように、これまでの実践の蓄積を生かして授業計画を立てることが重要となる。

現場の声

◎どのような問いを設定すれば、どのような資質・能力が育つのかを考えることが大切。

4 評価・検証

各教育活動の目標がどの程度達成できたのか、校内でしっかりと振り返り、評価・検証して初めて次なる改善へとつながる。そのためには、誰が、いつ、何を、どのような方法で評価・検証するのかを明確化し、実践することが必要となる。

現場の声

◎生徒が自分の変容に気づけるような、自己評価の場面を設定する必要がある。自己評価が習慣化できれば、自分より深い問いかけが可能になる。

◎評価するための材料(レポート、態度、小テストなど)を整理することが求められる。

◎目標準拠型評価の指標を作成し、生徒と教師で共有することが必要。

5 授業・指導改善

振り返り・評価をした結果を今後の授業・指導につなげることが、「学校教育デザイン」の一連のサイクルの最終ステップとなる。最終ステップとは言っても、ここで終わりではなく、再び学校教育目標や指導計画に立ち返り、時には目標や計画自体の見直しも図るなど、このサイクルを絶えず回すことが肝要である。

現場の声

◎一度決めた目標・計画にこだわりすぎず、トライアル&エラーで改善を積み重ねることが大事。

◎年度途中であっても小さい修正を容認することが重要。そして、小さい振り返りをどうやっていくかで、うまく進むかが決まる。

学校全体で回す 学校づくりのサイクル

以上の①～⑤の「学校教育デザイン」のサイクルを回していく上で求められるのが、「カリキュラム・マネジメント」の視点である。「答申」では、カリキュラム・マネジメントには、次の3つの側面があると説明されている。

(1) 各教科等の教育内容を相互の関係で捉え、学校教育目標を踏まえた教科等横断的な視点で、その目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列していくこと。

(2) 教育内容の質の向上に向けて、子どもたちの姿や地域の現状等に関する調査や各種データ等に基づき、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルを確立すること。

(3) 教育内容と、教育活動に必要な人的・物的資源等を、地域等の外部の資源も含めて活用しながら効果的に組み合わせること。

「学校教育デザイン」における①～⑤のサイクルが、まさに右記の(2)である。そして、(1)、(3)を踏まえて①～⑤のサイクルを確立

し、回すことによって「学校教育デザイン」は完成する。すなわち、学校教育目標を達成するために、必要に応じて教科の枠を超えて教科間・教師間で学習内容や指導における連携をしたり、地域や保護者等の外部資源を活用したりしながら、①～⑤のサイクルを確立し、回すことが求められる。

現場の声

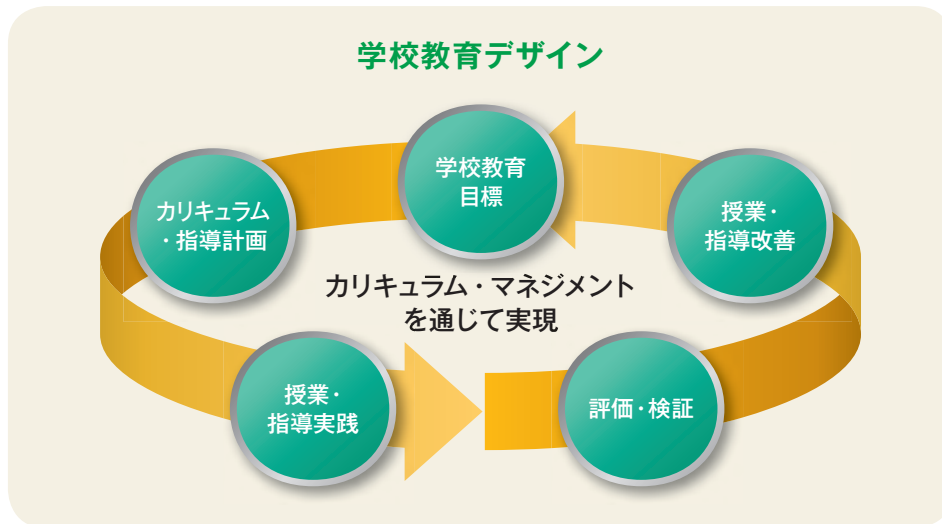
◎単に、異なる教科を融合した授業をすればよいということではない。教科の枠を超えて、社会に出てから役立つ能力を育成することが必要。

◎同じ教育目標を達成するわけなので、教科横断の問いの開発も求められるのではないか。

*

次ページより、「学校教育デザイン」の第1ステップである学校教育目標について、各校の現状を踏まえて今後のあり方を考えていく。また、これから求められる視点で学校教育目標を策定し、それを学校全体でしっかりと共有して、日々の指導の改善につなげている2校の事例を基に、学校教育目標の策定とその共有・浸透の具体的なポイントも示していく。

図4 学校教育デザインと弊誌・特集テーマ



2017年『VIEW21』高校版・特集・年間テーマ「2020年度・22年度に向けて『学校教育デザイン』を描く」

月号	4月号	6月号	8月号	10月号	12月号
特集テーマ	「学校教育デザイン」の基盤となる次期学習指導要領の方向性を、答申から読み解く	今後求められる「学校教育デザイン」とその実現の第一歩である学校教育目標のあり方を考える	学校教育目標達成のための教育活動全体のカリキュラムと指導計画のあり方を考える	目指す資質・能力を育むための各教科等における授業改善と評価のあり方を考える	実践事例から「学校教育デザイン」の実現のポイントを考える

「学校教育デザイン」の第一歩、 学校教育目標の策定

学校を取り巻く環境が大きく変化する中で、これからの時代を担う人材を育成する学校づくり、「学校教育デザイン」を描くことが求められる。その最初の一步が学校教育目標の策定だ。

不易と流行の視点を踏まえ、 全教師がかかわり策定する

学校教育目標とその策定は、次代を担う人材を育成する学校づくりの視点である「学校教育デザイン」を描く上での出発点であり、最も重要な要素の1つである。「答申」でも述べられているように、これからの学校教育目標は、自校が生徒にどのような資質・能力を育成するのかを明確化したものであることが求められる。

育成を目指す資質・能力は、学習指導要領を受け止めつつ、校訓や校是、建学の精神、学校や地域が創り上げてきた文化（校風）など、教育の根幹である「不易」の視点と、社会の変化や地域の実情、生徒の姿といった「流行」の視点を踏まえて考

えることが求められる。そして、学

校教育目標は、管理職などの一部の教師だけでなく、全教師がかかわりながら策定することが望ましいだろう。策定した学校教育目標は、学校全体で共有することはもちろん、地域や保護者などとも分かち合うことが重要である。

ここまで述べてきた、これからの学校教育目標のあり方、策定の流れをまとめたのが図1である。

地域や保護者のニーズ、 生徒の現状、伝統が基に

共有を図るといふ点で言えば、学校教育目標は校内外の多くの人が共感できるようなメッセージ性があり、かつ理解できる、具体的に分かりやすいものにすることが重要であ

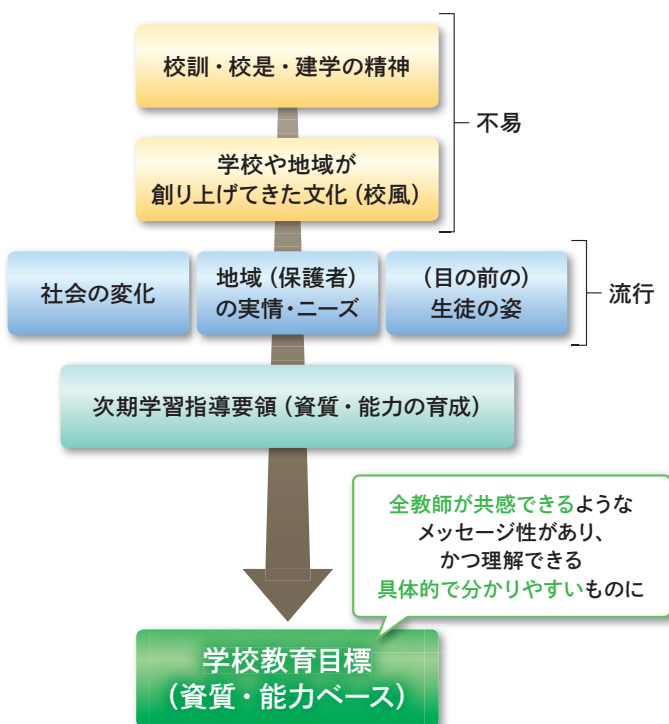
る。では、現在、各校が掲げる学校教育目標の現状と課題はどうなっているのだろうか。

まず、どのような学校教育目標が実際に掲げられているのか、その傾向を示したのが図2である。公立・私立ともに、多くの高校の学校教育目標に盛り込まれているのが、「自立 自主 主体性」「心の教育 豊かな心」といった言葉だ。それ以外にも、「人間性」「社会性 協調性」「学力向上 学力定着」「基本的な生活習慣」「自ら学ぶ力 自己学習力」と

いった言葉が、公立・私立ともに上位に位置している。

一方、公立・私立で異なる点は、公立が「地域 郷土」という言葉を多く盛り込んでいるのに対し（公立：51・8%、私立：15・8%）、私立は「国際 国際社会 グローバル」という言葉を多く盛り込んでいる（公立：32・0%、私立：53・7%）。さらに公立高校を学科別に見てみると、総合学科・専門学科とともに普通科と異なり、「基礎・基本」「社会規範 きまり」を学校教育目標の中

図1 これからの学校教育目標のあり方



上記の視点を踏まえた学校教育目標を、管理職だけでなく、全教師がかかわりながら策定し、それを学校全体で共有する

図2 高校が掲げる学校教育目標

	公立・私立別		学科別(公立)							
	公立	私立	普通科	総合学科	専門学科					
1	自立 自主 主体性	64.6	心の教育 豊かな心	67.2	自立 自主 主体性	66.5	自立 自主 主体性	66.7	地域 郷土	57.5
2	心の教育 豊かな心	56.4	自立 自主 主体性	64.3	心の教育 豊かな心	56.0	心の教育 豊かな心	61.1	自立 自主 主体性	56.1
3	地域 郷土	51.8	人間性	64.0	健康 体力	50.3	地域 郷土	55.6	人間性	55.7
4	人間性	49.9	思いやり	55.6	地域 郷土	49.7	社会性 協調性	51.1	心の教育 豊かな心	55.7
5	健康 体力	48.3	社会性 協調性	54.0	人間性	49.4	健康 体力	45.6	基礎・基本	54.2
6	社会性 協調性	46.8	国際 国際社会 グローバル	53.7	学力向上 学力定着	49.4	基礎・基本	45.6	基本的生活習慣	51.4
7	学力向上 学力定着	46.6	自ら学ぶ力 自己学習力	52.7	社会性 協調性	46.6	学力向上 学力定着	45.6	社会性 協調性	46.2
8	基本的生活習慣	41.2	学力向上 学力定着	51.1	自ら学ぶ力 自己学習力	42.2	人間性	42.2	健康 体力	42.9
9	自ら学ぶ力 自己学習力	40.5	生きる力	50.8	基本的生活習慣	37.9	社会規範 きまり	41.1	創造性 創造力	41.0
10	創造性 創造力	37.7	基本的生活習慣	45.0	創造性 創造力	36.8	基本的生活習慣	41.1	社会規範 きまり	36.3

出典/ベネッセ教育総合研究所「第6回学習指導基本調査」(2016年)

(%) ※複数回答

やすしいものにするとともに、継続的

教師が理解できる、具体的に分かり

①目標が抽象的で分かりにくいいた
め、教師によって理解度がまちまち
である

②時間が経つにつれて、教育目標へ
の意識が薄くなる

前述の通り、学校教育目標は、全
教師が理解できる、具体的に分かり

具体的で浸透しやすい 学校教育目標の設定が重要

では、「学校教育目標」に関して
はどのような課題があるのだろうか。
本誌読者モニターアンケート(図
3)や現場の教師へのヒアリングか
ら、学校教育目標の理解・共有の課
題として次のようなものが浮かび上
がってきた。

に盛り込んでいる学校が多い。
これらの言葉をどのような観点か
ら盛り込み、学校教育目標を策定
しているのかを現場の教師に聞くと
(図3)、「地域や保護者のニーズ」「生
徒の現状」「伝統、文化」といった
観点が基になったものであることが
推察できる。まさに、それは図1で
示した学校教育目標のあり方と重な
るものである。

に教育目標の理解・共有を図る仕組
みや風土をつくるのが重要、だと言
える。さらに、学校教育目標は一度
設定すればよいものではなく、社会
や生徒、地域の変化を受け止めた不
断の見直しが求められる。

次ページからは、学校が現に直面
する課題を踏まえ、学校教育目標を

策定し、校内外への共有・浸透を図
りながら教育改革を続けている2校
を紹介する。生徒の特性、そして学
校に対するニーズの異なる2校は、
どのような展望、そして決意を持つ
て学校教育目標を策定し、「学校教
育デザイン」の構築に取り組み始め
たのか、その成果とともに見ていく。

図3 学校教育目標に関する学校現場の状況

Q. 貴校の「学校教育目標」は、どのような観点を踏まえて策定されていますか。

- ◎校訓、現代社会の変化に応じたもの、地域や保護者のニーズなどをちりばめた内容かと思
います。(長野県)
- ◎伝統も鑑みっていますが、学校を取り巻く状況や生徒の現状を踏まえています。(愛知県)
- ◎学校・地域が創り上げてきた文化・校風や、地域・保護者のニーズが大きいと思います。(滋賀県)
- ◎校訓と校是に沿って、これまで築かれてきた学校文化を合わせて策定されているように思
います。(広島県)

Q. 貴校の「学校教育目標」は、その意味・内容が全教職員に理解・共有されて いると思われますか。

- ◎残念ながら、本校の学校教育目標は抽象的で分かりにくく共有されていません。具体的
な目標にブレークダウンしていく必要があると感じています。(北海道)
- ◎理解はされているようですが、共有という点になると、その具体的実践内容面で問題がある
と見えています。そこどころが(そしてそれが一番大事なことなのですが)、詰め切れていな
いため、抽象論で終わっているきらいがあります。(神奈川県)
- ◎年度初めに校長から説明があり、理解や共有を図りますが、仕事に追われる中で徐々に理
解が薄れていきます。共有を継続していくためには、定期的に確認していく必要があるよ
うな気がします。(静岡県)
- ◎教員によって理解に温度差があります。(大阪府)
- ◎知らないうちに職員会議に出てくるというのが実情です。(和歌山県)
- ◎具体的なイメージが湧きにくい目標、例えば「質の高い文武両道を目指す」って何をしたら
いいの?という感じで、ビジョンの共有がされていません。もっと計画的に教職員に共有す
る働きかけが必要だと感じています。(広島県)

出典/『VIEW21』高校版読者モニターへのアンケート結果(アンケートは2017年4月にウェブとファクスで実施。回
答数は52)

教育活動全般で育む資質・能力を明示し、生徒に高い自己肯定感を醸成する

山梨県屈指の進学校として高い評価を得てきた山梨県立吉田高校。その実績に慢心することなく自校の課題をいち早くキャッチし、自己肯定力を始めとする、生徒が3年間で身につけるべき力を学校教育目標として掲げるとともに、授業から学校行事まですべての教育活動の改善へと乗り出した。

「できて当たり前」に潜む新たな課題に気づく

山梨県では、2007年度から公立高校の入試が全県一学区制となった。それまでも県東南部の中核校として有為な人材を送り出してきた山梨県立吉田高校には、地域の各中学校の上位層が集まるようになり、ここ数年も進学実績を順調に伸ばしてきた。そして、17年度入試において、東京大学の合格者を、県内最多となる現役9人を出すに至った。

地方公立高校として着実に地域の期待に応えてきた同校だが、かつて

教頭として同校に勤務し、17年4月に新校長として赴任した高保裕樹校長は、近年の学校環境の変化を敏感に感じ取っていた。

「多くの生徒は中学校時代、優秀であったため、『勉強はできて当たり前』といった感覚で高校生活をスタートさせます。しかし、新たな集団の中で順位がついていき、下の層の生徒は自信を失ってしまいます。すべての生徒が本校での3年間をよりよく過ごすためには、学力だけでなく、多面的に生徒の成長を認める教育目標が必要だと考えました」（高保校長）

同校には、「百折不撓」「純剛」と

いう設立以来の校訓と、「Yoshida PRIDE」というキャッチフレーズがあり、生徒たちに愛されてきた。だが、「Yoshida PRIDE」が日々の高校生活の中でどのような態度や資質を示すのかは、教師や生徒個々の解釈に委ねられ、その具体的な評価も行われてこなかった。

「本校では『百折不撓』『純剛』を校訓に、『質の高い文武両道』を校風に掲げてきましたが、実はそれらは手段でしかありません。生徒一人ひとりが自分の成長を実感できる目標、すなわち、私たち教師が授業から学級経営、部活動や学校行事に至

るまで、そこでのようなことができる生徒を育てるのかを常に意識できる教育目標を打ち立てようと考えたのです」（高保校長）

高保校長は、自らの思いを古屋勇人教頭、小俣義一教頭に打ち明けた。「私たちが『生徒にはこうあってほしい』と考えてきたことは、実は目標ではなく、むしろ手段ではなかったのかと校長に言われ、正直はっとしました」（小俣教頭）

「校長と話す中で、変化の激しい時代を生きるために必要な力は何かを十分に吟味して、それを教育目標として掲げる必要性に気づきまし



山梨県立吉田高校
舟久保 豊 ふなくぼ ゆたか
 教職歴24年。同校に赴任して10年目。1学年主任。「人生一度、教師も生徒ももつと成長できる」



山梨県立吉田高校
飯室 毅 いむろ こし
 教職歴27年。同校に赴任して8年目。進路指導主任。「信念を持って高い志を貫く姿を生徒に示す」



山梨県立吉田高校教頭
小俣義一 おまた よしち
 教職歴30年。同校に赴任して2年目。「失敗を恐れず、最後まで諦めない心を育てる」



山梨県立吉田高校教頭
古屋 勇人 ふるや はやと
 教職歴32年。同校に赴任して1年目。「千里の道も一歩から」



山梨県立吉田高校校長
高保裕樹 たかは ゆうき
 教職歴34年。同校に赴任して1年目。「生徒の可能性を信じ、全力で、できる限りの支援をする」

高保校長は赴任後すぐに、両教頭と教育目標の検討を開始。「Yoshida PRIDE」を「何事にも自らの考えを持って主体的に臨み、他者を尊重するしなやかな心」と、その意味を明確にした上で、高校3年間を通じて

社会で生きる資質・能力を評価し、自己肯定感を育む

た」（古屋教頭）

山梨県立吉田高校

- ◎校訓は「百折不撓」「純剛」。新入生を対象にした校歌・応援歌指導、富士登山強歩大会などの伝統行事を持つ。総合的な学習の時間の中に「富士山学」を設定し、探究学習を行う。ウエイトリフティング、ラグビーなど部活動も盛ん。
- ◎設立 1937（昭和12）年
- ◎形態 全日制／普通科・理数科／共学
- ◎生徒数 1学年約280人
- ◎2017年度入試合格実績（現役のみ）
 国立大は、東北大、東京大、一橋大、名古屋大、大阪大などに106人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、中央大、明治大、早稲田大などに延べ569人が合格。
- ◎URL <http://www.yoshidah.kai.ed.jp/>

育てたい力を、教育目標「吉田高校グラデュエーション・ポリシー（吉高GP）」として明文化した（図1）。吉高GPで示されている8つの力は、AI（人工知能）が発達し、グローバル化が進む激動の時代を生き抜き、未来を切り拓くために必要な力であり、なおかつ、教師間・生徒間で解釈が異なることがないよう、生徒の「行動ベース」として具体的にイメージできるような表現・記述とした。また、「資質・能力ベース」とすることで、授業や教科学習だけではなく、学校行事や部活動など、すべての教育活動における共通の目標とすることを目指した。

図1 山梨県立吉田高校の学校教育目標「吉高GP」

教育の目的

「Yoshida PRIDE を持って 未来を生き抜くことができる生徒を育成する」

- Yoshida PRIDE …… 何事にも自らの考えを持って主体的に臨み、他者を尊重するしなやかな心
- 未来を生き抜くには …… 過去に学び、現在を知り、未来を考える手法を学ぶことが必要です

教育の目標

吉田高校グラデュエーション・ポリシー（吉高GP）
 この目的を達成するため、本校の3年間を通して次の8つの力を身につけることを目標とします。

- 1 自己肯定力 達成感を積み重ねることで、自信をつけます
- 2 傾聴力 他者の意見を謙虚に聴く習慣を身につけます
- 3 分析力 事実を客観的に分析する習慣を身につけます
- 4 思考力 物事を鵜呑みにせず、「何故か」を考える習慣を身につけます
- 5 発信力 自分の考えを、わかりやすく他者に伝える方法を身につけます
- 6 想像力 未来（結果）を考え、想像する力を身につけます
- 7 創造力 課題を解決する方法を創造する力を身につけます
- 8 行動力 自身の考えに基づき、行動する力を身につけます

教師・生徒、いずれにおいても、これまでそれぞれの解釈で捉えていた「Yoshida PRIDE」の意味を明確化

抽象的であった教育目標を資質・能力の形で具体化

次期学習指導要領でも示されることになる資質・能力の柱の「判断力」や「表現力」などを、さらに細分化

上記の目標を設定したねらい

- 学力だけでなく、多面的に生徒の成長を認め、生徒の自己肯定感を高める
- 教師間・生徒間で教育目標の解釈が異ならないようにする
- 授業や教科学習だけでなく、部活動や学校行事も含めたすべての教育活動において、目的、評価・振り返りの視点、改善の方向性を明確化する

上記の目標を設定したことによる効果

- 授業だけでなく、学年集会などでも生徒たちの主体性の高まりが見られた
- 学校教育目標を踏まえた、高校生活全般を評価するルーブリックの案が教師から主体的に出された
- 数字に表れない生徒の変化や成長を評価するようになった

「吉高GPは、8つの力で表されていますが、私が特にこだわったのは、自己肯定力を最初にうたうことです。今の生徒たちにこそ、成績だけにとらわれない広い視野で、自分の、そして仲間の持つ輝きに気づいてほしいと思いました」（高保校長）

教育目標の中に「進学校」という文言を盛り込まなかったのも、「大学に進学すること」だけを高校生活での目的・目標にしてほしくないという、高保校長の教育観に基づく判断である。

進路指導主事の飯室毅先生は、『『進学重視』などと掲げて、高校生活の過ごし方を生徒に押しつけてはいけない。多様性を認め合う学校にしたい』という高保校長の言葉に、大きな刺激を受けたという。

「校長からは『進路指導部として、社会の変化と多様な進路希望に対応できる体制を構築してほしい』と言われました。校長が、大学進学を否定しているわけではないことはすぐに理解できました。難関国立大学に進学を希望する生徒も、就職を希望する生徒も、あるいは今後出てくるであろう海外大学に進学を希望する生徒も、自分の夢を堂々と語るこ

ができる雰囲気をつくりたい。そして、すべての生徒の希望をかなえるために全力でサポートする学校でありたいと思いました」（飯室先生）

吉高GPは主任会議、職員会議と検討の場に出されていった。高保校長は職員会議で、「吉高GPが策定された暁には、一つひとつの教育活動において、それが本校の教育目標のどの力の育成を目指している活動なのか、生徒にしっかりと伝えていただきたい」と、教師全員に訴えた。

「各教育活動で、それぞれのような力を身につけさせたいのか、教師が同じ言葉で具体的に生徒に語ることであれば、教育効果はますます高まるでしょうし、今回は何が達成できて、何が達成できなかったのかが明確になり、次回以降の改善がスムーズになるはず。さらに、各学年の生徒の特性と照らし合わせながら行事の進め方などを工夫することもできますから、学校の取り組みが機械的な前年踏襲に陥ることもないでしょう」（古屋教頭）

個々の教育活動の目的が「暗黙の了解」の状態では、振り返りは運営上の問題にとどまってしまう。目的ののちの振り返りのためには、

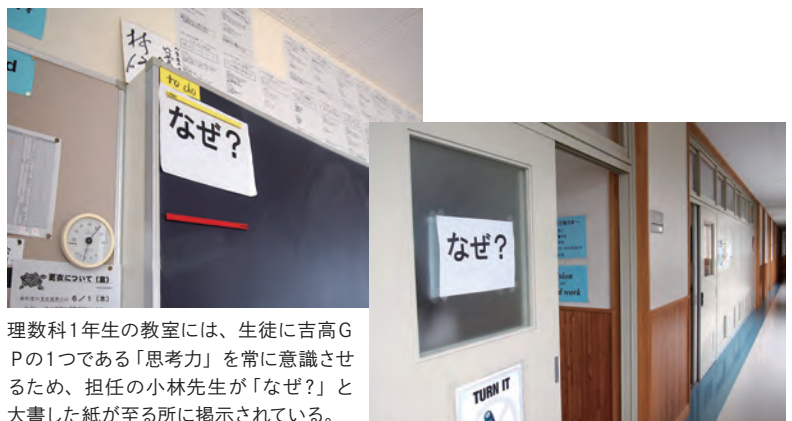
取り組みの目的の言語化が不可欠であり、そのよりどころとしての役割が吉高GPに期待されているのだ。

学校の諸活動を横断的に評価し、つなぐツールに

策定された吉高GPを、高保校長は生徒、保護者に対して積極的に発信した。全校集会では、生徒に「今後は、行事に臨む時に、その行事を通して自分は吉高GPのどの力を伸ばすのかを意識し、それが分からない時は先生に聞いてください」と語りかけた。さらに、「もしも答えられない先生がいたら、私に教えてください」と笑顔で続け、生徒、教師に吉高GPの大切さを訴えた。

「保護者総会で吉高GPの説明を受けた保護者から、『学校では、人間力を育てようとしているのですね』と言われたのは、うれしかったですね。今後、吉高GPを基に、『この行事ではこの力の育成を重視しています』と担任がその都度お伝えすることで、さらに保護者も関心を持ってくれるはずです」（小俣教頭）

吉高GPを踏まえ、授業改善も進んでいる。まず、高保校長が平素の



理科1年生の教室には、生徒に吉高GPの1つである「思考力」を常に意識させるため、担任の小林先生が「なぜ?」と大書した紙が至る所に掲示されている。

授業観察で活用するチェックシートを、吉高GPの観点で見直し、全教師に配布した。その結果、日々の授業で、教師が8つの力の育成を意識するようになった。

「早速、傾聴力、分析力の大切さを実感できるグループワークを、国語の授業で行いました。類似の活動を今までにも行ったことはありますが、大きく異なるのは、8つの力のどの力を育成するのかを明らかに意

図2 吉高Gグループリック

		GP評価(5月)				評価
		S	A	B	C	
GP力	傾聴力	授業「実況」生活の場面で傾聴し、相手の気持ちを察し、必要に応じて適切な言葉で応答する。	授業「実況」生活の場面で傾聴し、相手の気持ちを察し、必要に応じて適切な言葉で応答する。	授業「実況」生活の場面で傾聴し、相手の気持ちを察し、必要に応じて適切な言葉で応答する。	授業「実況」生活の場面で傾聴し、相手の気持ちを察し、必要に応じて適切な言葉で応答する。	
	思考力	自分の考えを整理し、相手に伝えることができる。	自分の考えを整理し、相手に伝えることができる。	自分の考えを整理し、相手に伝えることができる。	自分の考えを整理し、相手に伝えることができる。	
	発信力	自分の考えを整理し、相手に伝えることができる。	自分の考えを整理し、相手に伝えることができる。	自分の考えを整理し、相手に伝えることができる。	自分の考えを整理し、相手に伝えることができる。	
	創造力	自分の考えを整理し、相手に伝えることができる。	自分の考えを整理し、相手に伝えることができる。	自分の考えを整理し、相手に伝えることができる。	自分の考えを整理し、相手に伝えることができる。	
	想像力	自分の考えを整理し、相手に伝えることができる。	自分の考えを整理し、相手に伝えることができる。	自分の考えを整理し、相手に伝えることができる。	自分の考えを整理し、相手に伝えることができる。	
	行動力	自分の考えを整理し、相手に伝えることができる。	自分の考えを整理し、相手に伝えることができる。	自分の考えを整理し、相手に伝えることができる。	自分の考えを整理し、相手に伝えることができる。	
	分析力	自分の考えを整理し、相手に伝えることができる。	自分の考えを整理し、相手に伝えることができる。	自分の考えを整理し、相手に伝えることができる。	自分の考えを整理し、相手に伝えることができる。	
	自己肯定力	自分の考えを整理し、相手に伝えることができる。	自分の考えを整理し、相手に伝えることができる。	自分の考えを整理し、相手に伝えることができる。	自分の考えを整理し、相手に伝えることができる。	
	学習習慣	自分の考えを整理し、相手に伝えることができる。	自分の考えを整理し、相手に伝えることができる。	自分の考えを整理し、相手に伝えることができる。	自分の考えを整理し、相手に伝えることができる。	
	生活習慣	自分の考えを整理し、相手に伝えることができる。	自分の考えを整理し、相手に伝えることができる。	自分の考えを整理し、相手に伝えることができる。	自分の考えを整理し、相手に伝えることができる。	
		S5点	A4点	B2点	C1点	
		1年()組()番 氏名()				/50点

1学年主任の舟久保先生が作成した1年生5月の吉高Gグループリック。これは舟久保先生が作成した試作版であり、今後管理職を中心に吟味した上で、実践に移る。

識した上で取り組むようになったこととです。アクティブ・ラーニングの視点の導入が進むほど、大学入試のその先でも生きる力として、8つの力を強く意識するようになるでしょう」(飯室先生)

1学年主任の舟久保先生は、吉高GPの8つの力を自己評価できるグループリックを作成した(図2)。「第1回定期考査を終えた後に、学校活動全般について、吉高GPの観点で自己評価してもらおう予定です。定期的に自己評価を行うことで、生徒が自身の変化を把握できるようにしたいと思います」(舟久保先生)

このグループリックは、舟久保先生

が自発的に作成した。学年団の長として、授業、行事での生徒の成長を吉高GPの観点でつなげようと自ら挑戦していることに、「先生方が主体性を発揮していることがうれし」と、高保校長は目を細める。

「これまでは、『本校の生徒であれば、高いハードルを越えて当たり前』という気持ちでが私自身、強すぎた」とい

学校教育目標は「どう育てるのか」という教師への問い

吉高GPを策定しておよそ2か月。短期間のうちに生徒、教師双方に様々な変化が見られたという。

「今年度の生徒たちは見事だ」と我知らず口にすることもあるという。

「応援歌指導や富士登山強歩大会など、先輩から受け継いだ伝統行事においても、教育目標の8つの力が育まれることを、教師は生徒に明確に語れるようになりました。その結果、生徒も担任も、順位だけでなく、プロセスに表れる姿勢や態度を評価するようになりました」(飯室先生)

高保校長も、生徒一人ひとりの中にある「数字では表せない素晴らしい

さ」を、教師が確実に評価することの大切さを強調する。

「例えば、きちんと掃除をすることも、8つの力に確実に関連します。校長としては、そうした生徒の地道な努力に光をあて、積極的に表彰していきたいと思っています。ただ、そのためには、先生方に生徒のよいところを丁寧に見つけてもらわなければなりません。教師集団全体で生徒のよいところを見つけ、一人ひとりに高い自己肯定感を醸成したいと思います」(高保校長)

今年度末までには、吉高GPを評価するテストを開発したいと話す高保校長。すべての生徒に光をあて、自己肯定感を育む学校づくりへの決意は、各教師にも共有されている。

「文武両道を掲げても部活動をやるめる生徒はいますし、百折不撓をうたっても大きな挫折を経験する生徒もいます。それでも日々を生きる生徒にとつて、吉高GPは常に学びの指針となるはず。吉高GP、すなわち教育目標は、『目の前の生徒をどう育てるのか』という学校から教師への問いかけであり、その問いに対する我々の答えが日々の教育活動だと思っています」(舟久保先生)

教育スローガンを掲げ、学校内外への浸透を図ることで、目指す学校像を実現する

退学者の多さ、志願者減少に苦しんでいた埼玉県立宮代高校は、学校改革に先立って学校教育目標を解釈し直し、よりシンプルなスローガンとして明示。教師の目線合わせを促すとともに、目指す学校の姿を地域・保護者へアピールし、退学者の半減、志願倍率の向上を実現した。

形骸化した学校教育目標を「生きた目標」に変える

埼玉県立宮代高校では、西浦大治 郎校長が赴任した2015年度から「とことん生徒の面倒をみる宮高」をスローガンに掲げ（図1）、全教職員を挙げて学校改革に取り組んでいる。

同校には、竹内榮次前校長の時代から「生徒一人ひとりの『よさ』を伸ばし、次代をたくましく生き抜くための学力と規範意識を身に付けた人間を育てる」という学校教育目標（目指す学校像）がある。西浦校長は、

この目標をそのまま受け継ぎつつ、それを実現するための理念を現場の教師や地域・保護者に浸透させるために新たなスローガンを掲げた。

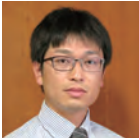
「教育目標を引き継ぐのは、教育の継続性という点で大切です。ただし、それを生きた目標として周知し、具体的な教育活動に落とし込んでいくためには、その時の学校を取り巻く状況に応じて目標を解釈し直し、より分かりやすく提示する必要があると考えました」（西浦校長）

西浦校長が学校教育目標の再解釈の必要性を感じた背景には、2つの深刻な課題があった。1つは、退学

者の多さである。同校では、1年間に40人以上が何らかの理由で退学する状況が何年も続いており、「一人ひとりの『よさ』を伸ばし切れていない」とは言えない状況だった。もう1つは、定員割れの恒常化である。10年度から3年連続の定員割れにより生徒の質が低下し、生徒指導上の問題も多発するようになった。部活動の活性化など、竹内前校長の努力で14年度の志願倍率は1倍を超えたが、なお予断を許さない状況であった。

そうした状況の中、教師は目の前の生徒指導に忙殺され、「生徒一人ひとりの『よさ』を伸ばし……」という教育目標を顧みるゆとりがなかった。また、当時は大学進学実績の向上を図ることで学校の魅力を高めるというのが、学校の方針となっていた。「大学合格者数100人超」を目標に掲げて学力向上に努めたが、目標と現実のギャップを感じる教師も少なくなかった。教務主任の七草木俊先生はこう振り返る。

「当時、現場の教師にとっては、進学実績の向上よりも、赤点を減らしたい、退学を食い止めたいという思いの方が強かったと思います。指導方針と現場の思いとのギャップが大きかったために、教育目標の実現と



岩下和尋 埼玉県立宮代高校
教職歴4年。同校に赴任して4年目。「物事に正面から向き合える心の強さを身につけさせる」



七草木俊 埼玉県立宮代高校
教職歴7年。同校に赴任して7年目。「真剣勝負、学び続けることで才能は開花する」



曾我理 埼玉県立宮代高校
教職歴23年。同校に赴任して4年目。「当たり前のことを高いレベルでできる環境で生徒は成長する」



本城千晶 埼玉県立宮代高校教頭
教職歴24年。同校に赴任して2年目。「常に先を見る。話をしっかり聞く。明確に伝える」



西浦大治郎 埼玉県立宮代高校校長
教職歴34年。同校に赴任して3年目。「洞察力、機動力、対話を重視した教育活動を実践する」

いうところまで考えを巡らすことはできませんでした」

根本理念を共有することで 継続性・柔軟性が高まる

退学者が多い学校として地域に認知されることで、さらなる志願者減少を招き、それが生徒の質を低下させていく……。その悪循環を断ち切り、活力ある学校をつくっていか

ければならないというのが、西浦校長の考えだった。

「教育に特効薬はありません。目の前の生徒に向き合い、一人ひとりを大切に、とことん面倒を見ていく。それしか悪循環を断ち切る道はないと考え、その思いをスローガンに込めました」（西浦校長）

学校によってはわざわざスローガンを立てず、課題に応じた取り組みを矢継ぎ早に打っていく場合もある。スローガンを掲げ、それを教師間で共有することの意味を、西浦校長は次のように説明する。

「教育には哲学が必要だと、私は考えています。根幹となる哲学がなければ、取り組みが場当たりので続

埼玉県立宮代高校

- ◎校訓は「ごく、たゆまず、たくましく」。基礎学力の向上、教育相談体制の確立、教員研修の充実を3本柱とする学校改革を推進中。部活動も活発で、16年度インターハイ出場のアーチェリー部、演劇部などが実績を上げている。
- ◎設立 1982（昭和57）年
- ◎形態 全日制／普通科／共学
- ◎生徒数 1学年約240人
- ◎2017年度進路実績（現役のみ）
私立大は、大東文化大、拓殖大、日本などに延べ28人が合格。短大、専門学校進学54人。就職55人。
- ◎URL <http://www.miyashiro-h.spec.ed.jp/>

図1 埼玉県立宮代高校の学校教育目標とそれを実現するための教育スローガン

学校教育目標
（目指す学校像）

生徒一人ひとりの「よさ」を伸ばし、
次代をたくましく生き抜くための
学力と規範意識を身に付けた
人間を育てる

教育
スローガン

とことん生徒の面倒をみる宮高

ここに課題があること、そして、その背景にある問題と原因を考え、それを全教職員で共有した上で、教育目標を実現する理念として教育スローガンを打ち立てた

問題と原因

- 退学者の多さ
- 恒常化する定員割れ
- 生徒指導による教師の多忙化
- 指導方針と現場の思いとのギャップ

上記のスローガンを設定したねらい

- より手厚い指導を通して、退学者の減少と志願者増加を図る
- 課題の共有化を図り、教師間の目線合わせを進める
- 課題と理念を具体的な教育実践に結びつける

上記のスローガンを設定したことによる効果

- 教師間の目線合わせが進み、学校全体の一体感が増した
- スローガンに基づいて具体的・実地的な指導が可能になった
- スローガンをよりどころとして、取り組みのブラッシュアップが進んだ
- 学校の特徴を中学生・保護者にアピールしやすくなった

一感のないものになり、仮に成功しても普遍的なものにはなりません。また、方策自体に固執して変化に対応できず、形骸化することもあります。根本理念を教師間で共有することで継続性が高まるだけでなく、状況が変わった時にも柔軟に対応していくことができるのです」

スローガンの共有は、次のようなプロセスで行われた。まず、西浦校長が着任してすぐに、学校経営方針としてのスローガンを作成し、全教職員に伝えた。そして、年度当初に校長が全教職員一人ひとりを行う面談、週1回の企画委員会や職員会議など、あらゆる場面を使ってスローガンの大切さを訴えていった。その際、単にスローガンを繰り返すだけではなく、その背景にある課題の共有も徹底した。

「スローガン自体はありきたりな文言だからこそ、スローガンを浸透させ、血肉化させるためには、背景にある課題についても理解してもらうことが必要です。現実には即した課題なので、先生方にも違和感なく受け止めていただけたと思います」(西浦校長)

実際、スローガンは現実味を持つ

て受け止められ、教師たちがベクトルをそろえて改革に踏み出す第一歩となった。本城千晶教頭は、「学校の課題とセットで提示されることでスローガンの意味がより理解しやすくなったと思います。文言自体もシンプルなので、先生方の意識に浸透しやすく、具体的な取り組みへの落とし込みや、その後の動き出しもスムーズに進みました」と振り返る。

理念を共有することで指導のブラッシュアップが容易に

スローガンを共有した後は、それを具体的な指導に落とし込んでいくプロセスへと移行した。理念を実践に移していく過程で推進役となったのが、企画委員会である。管理職と各分掌・学年主任から成る会議体で、埼玉県では常置する決まりになっているが、以前は、職員会議の事前打ち合わせにとどまりがちであった。西浦校長は、それを学校の現状や課題を共有する場として位置づけ、各分掌・学年から意見を吸い上げて、理念実現に向けた取り組みを策定する場へと機能させた。

同委員会の主導の下、ベネッセの

図2 スローガンに基づいて
新設・改善された取り組み一覧

① 朝学習

全学年で毎朝 SHR 前の 10 分間、「マナトレ」基礎編(国語・数学・英語)に取り組む。

② 土曜勉強マラソン

1~3年生の希望者を対象として、定期考査直前の土曜日に、午前4コマ・午後2コマの自学自習・特別講座を実施。

③ 指名補習

不得意科目がある生徒を対象に、定期考査前の放課後、5教科の教科担当教師が該当者を指名して補習を行う。

④ 部活動勉強会

定期考査1週間前から、部活動の中で自学自習と学び合いに取り組む。

⑤ 学習サポーターの活用

事前登録した大学生10人が、「土曜勉強マラソン」や「部活動勉強会」などのサポートを行う。

⑥ 教育相談連絡会の設置

教頭・学年主任・保健主事・養護教諭から構成される組織で、各クラスや保健室からの情報を基に、スクールカウンセラーや巡回支援員と連携を図る。

「マナトレ(※)」を使った毎朝10分間の朝学習、定期考査前の指名補習(教科担当教師が、不得意科目がある生徒を指名して行う補習)、大学生が日頃の授業や朝学習、補習のサポートを行う「学習サポーター」の活用などの取り組みが次々と導入された(図2)。また、カウンセリンクの定期実施、特別支援教育の専門家との連携など、メンタル面から生徒を支える体制も整えられた。

新たな取り組みが立ち上がるだけでなく、スローガンがあることで、従来の取り組みの修正も容易になった。例えば、土曜日に実施する自学自習の勉強会「土曜勉強マラソン」

は、「とことん面倒をみる」方針の下、大学生の学習サポーターを活用し、より手厚くサポートできるように体制が改善された。

逆に、「とことん面倒をみる」という観点から廃止した取り組みもある。西浦校長の赴任1年目、「中間考査段階で生徒の実態を把握し、その段階で手を打つ」ことが経営方針に盛り込まれ、実践された。しかし、あまりに業務が煩雑で、かえって生徒に向き合う時間が足りなくなるといった声が続出したため、翌年廃止された。

「よりどころとなるスローガンがあるからこそ、生徒や教師の実情に

*ベネッセの教材の1つ。学習力を身につける、小・中学校範囲の学び直し専用のプリント教材。

合わせて適正かつ迅速にスクラップ&ビルドができます」(西浦校長)

実践を重ねることで 理念はさらに浸透する

スローガンが指導計画を策定する際、どのようになるとともに、実践を重ねること、より深く理念が浸透していく効果もある。3学年主任の曾我理先生は、「当初は、手厚い指導により退学者が減り、志願者増加につながるという西浦校長の言葉を信じて、がむしゃらに取り組みただけでした。しかし、朝学習や指名補習などで徹底的に生徒と向き合ううちに、私自身、生徒との距離が近くなり、学習習慣が身についているという手応えを感じられるようになりました。今は、生徒の反応や成長を身近に感じることで、私自身の達成感や励みになっていきます」と語る。企画委員会における提案も、当初は管理職が中心だったが、教師がスローガンに基づく教育活動の効果を実感するにつれ、企画委員や各分掌からの提案が増えていった。七草木先生は、「『とことん面倒をみる』ということは、生徒一人ひとりの特性

に応じてきめ細かく指導をしていくということ。これまでだったら『そこまでやるのか』と言われるような取り組みも提案しやすくなりました。また、教師間でスローガンが共有されているので、生徒に対して『積極的に取り組む者にはとことん指導する準備が、どの先生もできている』と、自信を持って言えるようになりました。理念の共有は生徒との信頼関係を構成する上でも重要ですよ」と語る。

校内でスローガンが共有されたことで、外部に向けて胸を張って学校をアピールできるようになったのも大きな変化だ。前中高連携委員長の岩下和尋先生は、「以前からも、とことん面倒を見る教師はいました。ただし、それをスローガンにして学校全体で共有することによって、『自分』ではなく、『本校は』とことん面倒を見ると、自信を持って発信できるようになりました。学校のスタンスが伝わりやすくなり、中学生や保護者、中学校に期待感や信頼感を持って受け止めていただけているのを感じています」と手応えを語る。学校の方針や活動内容を発信していくことで、スローガンに対する認

識が教師の中でさらに深まり、より生きた理念として浸透していくのである。

次の改革は「進路」を 軸とした取り組みへ

改革に着手して2年、学校の雰囲気は大きく変わった。14年度に43人だった退学者は、15年度は25人、16年度は21人と半減した。志願倍率も、定員割れ寸前だった15年度から持ち直し、16年度は1・05倍、17年度は1・08倍にまで改善した。多くの教師が、「1年ごとに違う学校のようになっていく」と感想を漏らしている。部活動も、かつては放課後16時頃にはほとんど校庭に生徒がいない状態が続くこともあったが、今は2年生が中心となって多くの部が活発に活動している。

保護者の学校への関心も高く、かつてはまばらだった体育祭や文化祭も、今では100人以上の保護者が来校するようになった。地域の信頼も回復し、同校の生徒に対するボランティア活動や地域の行事への参加の依頼も増え、多くの生徒が積極的に参加している。「先生方が生徒一

人ひとりと向き合うことで生徒の自己肯定感が高まり、積極性が増してきているのでしよう」と、本城教頭は語る。

課題は、退学者のさらなる減少だ。カウンセリング体制などを強化し、より手厚い指導を続けていく。そして、1年ほどの検証期間をはさんだ後、改革を次のステップに移行させる。そのキーワードは「進路」だ。同校は、大学・短大進学者、専門学校進学者と、就職者がほぼ同比率だが、進路に対する意識はまだ高くなく、16年度の3学年は30人が進路未定のまま卒業した。これまでは将来の進路に目を向けない生徒もいたが、生徒の質が変わってきた今は、「将来」を見据えた様々な取り組みを仕かけていきたいと、西浦校長は語る。

「本校に入学してきてほしいのは、目的意識を持った生徒です。部活動が盛ん、就職に強いなど、何でもよいので、魅力を感じ、自分の目的をかなえるために、本校を選んでほしいと考えています。進学にせよ、就職にせよ、目的意識を持って学校生活を送ることでおのずと退学者が減り、一人ひとりの進路が開けてくる」と期待しています」(西浦校長)

5月●全体共有

検討委員会のメンバーが、 全教師に開発の成果を共有

カリキュラム・マネジメント委員会を中心に、探究学習・ALを通して育てたい生徒像と各教育活動の関係、具体的な取り組み内容を話し合ってきた龍谷大学付属平安中学校・高校（図）。17年度になると、同委員会のコアメンバーが、同校の全教師が出席する校内会議で、探究学習・AL化する教育活動とその内容を発表した（写真）。校内に探究学習・ALのカリキュラム開発の成果を周知・共有することで、全教科・科目で、「習得・活用・探究」といった学びの過程全体を通して実現する探究学習・ALの観点での授業改善に取り組ん

探究学習・ALを検討する中で、 これからの教育という問いを立てる

探究学習及びアクティブ・ラーニング（以下、AL）の開発と、教育活動全般の改善に取り組む龍谷大学付属平安中学校・高校。開発の成果を校内に周知し、いよいよ実践をスタートさせる。

でいくこと、また、行事やイベントを中心とした問題解決型の探究学習と教科学習を有機的に結びつけていくことを求めた。こうして、探究学習・ALは学校のすべての教育活動を改善していく軸として、全校体制で取り組まれていくこととなった。

校内会議の後、コアメンバーが、この半年間の活動を改めて振り返った。そこでは、次のような成果や課題が語られた。

「一番の成果は、他教科の先生の指導の内容、担当外の教育活動のねらいがよく分かるようになったことだ。個々の教育活動を点で終わらせずに線でつなげて、生徒が学びの意味や自分の生き方を様々な角度から、しかも他者との対話の中で深め、広げられるような指導を模索し続けたい」

「議論の中で、どうすれば参加者が熟考し、意見を出しやすくなるかなど、学びを深める会議のつくり方を学べたことは予想外の収穫だった。ほかの先生の意見を聞くことで成長できた。他者との対話を通して成長する感動をぜひ生徒にも伝えたい」

「学校力向上には、年間目標の達成に向けて、学年、分掌、教科が各々でPDCAサイクルを展開することが必要だと痛感した。教師間の連携を密にすることで、個々の教師の力量が相乗的に発揮される強い組織をつくる時期に本校は来ている」

同校の教師たちは、「探究学習」という新しい学びをつくる過程の中で、教師としてのこれからのあり方を、まさに主体的・対話的に深く考え、自らの内面につくり上げたのだ。

探究学習・AL開発のフロー	
研究協議日	内容
2016.10.21	第1回検討会「学習の意義・目的の明確化」 場所：同校・第二会議室
2016.11.16	第2回検討会「学習のコンセプトの作成」 場所：同校・第二会議室
2016.12.14	第3回検討会「学習のコンセプトの具体化」 場所：同校・第一会議室
2017.01.25	第4回検討会「各教育活動におけるカリキュラム案の作成・検討」 場所：同校・第一会議室
2017.02.24	第5回検討会「探究学習・ALのカリキュラム決定とその実施のためのto doの整理」 場所：同校・第一会議室
2017.05.01	全体共有「ベネッセコーポレーションとの協働開発の最終報告」 —「主体的・対話的で深い学び」(アクティブ・ラーニング)の実践に向けて— 場所：同校・第一会議室



写真 探究学習・ALでどのような生徒を育てるのか、学校の教育活動はどのように改善されるのかを、コアメンバーが発表した。

主体的・対話的で深い学び (アクティブ・ラーニング)を通じた 探究学習の実践に向けて

——ベネッセコーポレーションとの協働開発を終えて



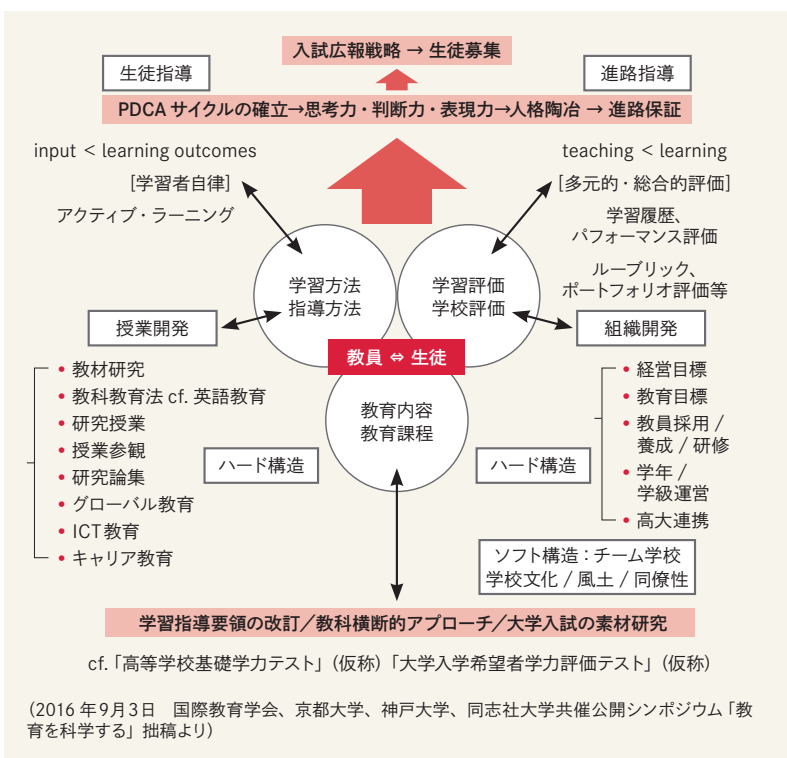
校長補佐
平井正朗
ひらい・まさひろ

「何を学ぶか」に加えて、「どのように学ぶか」を重視した学びの実現、「主体的・対話的で深い学び」(アクティブ・ラーニング)の実践、さらに、教科や学年を超えた教育活動を支える組織運営の改善をねらいとする「カリキュラム・マネジメント」が問われる中、ベネッセコーポレーションとの「探究学習」(アクティブ・ラーニング)の協働開発は、本校が取り組んできた高大接続教育等を検証・整序する機会となった。「建学の精神を土台にした探究学習を目指す」という方針の下、その開発・推進に向けて「体系的な組織運営でコンピテンシーの育成」を掲げ、下図のような概念構成を意識した。その上で、学年、教科、分掌におけるPDCAサイクルの実践を方向づける意味で「カリキュラム・マネジメント委員会」を組織した。

「何を学ぶか」に加えて、「どのように学ぶか」を重視した学びの実現、「主体的・対話的で深い学び」(アクティブ・ラーニング)の実践、さらに、教科や学年を超えた教育活動を支える組織運営の改善をねらいとする「カリキュラム・マネジメント」が問われる中、ベネッセコーポレーションとの「探究学習」(アクティブ・ラーニング)の協働開発は、本校が取り組んできた高大接続教育等を検証・整序する機会となった。「建学の精神を土台にした探究学習を目指す」という方針の下、その開発・推進に向けて「体系的な組織運営でコンピテンシーの育成」を掲げ、下図のような概念構成を意識した。その上で、学年、教科、分掌におけるPDCAサイクルの実践を方向づける意味で「カリキュラム・マネジメント委員会」を組織した。

即興で話すといったアプローチであり、後者は、行事やイベントを通して特定テーマについての書籍を読み、背景知識を蓄え、課題を抽出、解決に向けての意見を書き、議論を重ねて納得解に向けて発表、プレゼンテーションするアプローチのことである。評価については、個別教科の知識理解を問う客観テストによる「ドメイン準拠評価」並びに、課題発見・解決型で納得解・最適解を求める「スタンダード準拠評価」(パフォーマンス評価)の融合が不可欠だが、前者に傾きやすい5教科については本校オリジナルの「5教科CANIDORリスト」(生徒が年2回、各自を振り返る学校評価の一種)をさらに精査していくことで改善を促している。アクティブ・ラーニングを通じた探究学習に向けて、今後、さらに留意すべき事項を挙げておく。

- ・生徒に問題解決型探究の意義を十分伝えた上で、日頃の教科学習における基礎・基本の徹底を図る。
- ・問題解決型探究と講義式授業とのバランス、授業進度に配慮する。
- ・ペアワークやグループワークにおいて、すべての生徒をモニターすることはできない。評価につながる客観的事実はメモしておくなどの工夫が必要である。
- ・生徒がグループワークになじめるように人間関係に配慮する。役割をイメージさせ、全員参加を促す。
- ・パフォーマンス評価、ルーブリック



クによる評価等、多面的評価指標への理解の共有を促進。英語はCANIDORリストとの整合も不可欠。

・教師の評価に加えて、生徒の自己評価や相互評価を取り入れる。

次期学習指導要領に関する「答申」では、学校の教育目標を踏まえた教科横断的な視点と内容、質の向上、さらには必要な人的・物的資源等として外部の資源も含めた活用が言及されている。今回のコラボレーションは、前例踏襲主義への挑戦であり、現状を見つめ直すことができる絶好のチャンスであった。

科学技術の革新とともに、労働市場のグローバル化による高度人材への需要増加、内外の産業構造も多様化している。生徒個々の潜在能力を最大限に引き出し、複雑化する地球レベルの問題に果敢にチャレンジし、納得解を導ける背景知識、論理的思考力、課題発見・解決能力を育めるメソッド開発へのネクスト・ステップは、今、始まったばかりである。

●3年生「公民（政治・経済）」の授業。この日は、「日本国憲法で保障された人権」について考えた。自由権や社会権の意義を考える具体的な事例を通して、「公正とは何か」「幸福とは何か」といった考察を深めた。（P.23に授業デザインを掲載）

議論しやすいように、机をコの字型に並べた教室で、まず、生徒の1人が前日に気になったニュースを、「今日の時事一言」として発表。毎回ランダムに指名されるため、全員が準備している。続いて、前時の終了後に生徒が記述した「リアクションペーパー」から、ベストクエスチョンとして1人の疑問を紹介し、皆で考えた。

生徒に絶えず問いかけて
発言をつなぐことで議論を活性化し、
教室全体で思考を深めていく

前田先生のアクティブ・ラーニング

問いかけを繰り返して
教室全体で思考を深めていく

生徒に向けて絶えず「問い」を投げかけ、生徒の自由な発言をつないで教室全体で思考を深めていくのが、前田先生の指導スタイルだ。積極的な発言を促すため、生徒が向かい合うコの字型に机を配置した教室で、前田先生は真ん中のスペースに入り、生徒の発言を拾いながら思



石川県・国立
金沢大学人間社会学域学校教育学類附属高校
前田健志 まえだ・たけし

教職歴11年。
同校に赴任して8年目。地理歴史・公民科主任。
アクティブ・ラーニングの実践は12年目になる。

金沢大学人間社会学域学校教育学類附属高校

◎科学者の育成を目的とした特別科学学級を母体として設立。「自主自立」「独立自治」の精神を重んじる。2014年度より文部科学省「スーパーグローバルハイスクール（SGH）」の指定を受ける。

◎設立 1947（昭和22）年

◎形態 全日制／普通科／共学

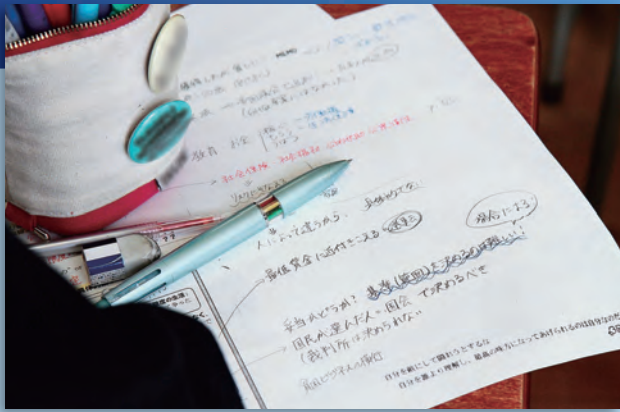
◎生徒数 1学年約120人

◎2017年度入試合格実績（現役のみ）

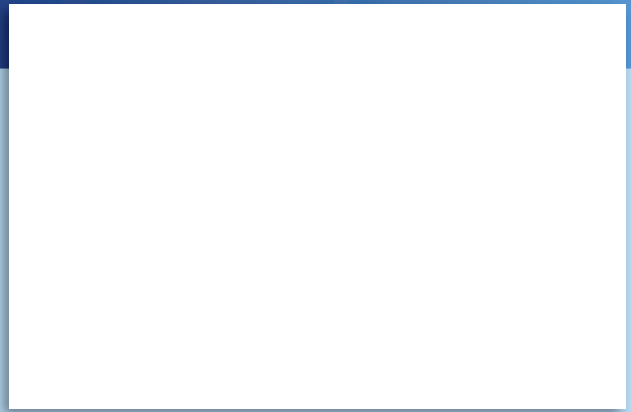
国公立大は、東京大、東京外国語大、金沢大、京都大などに51人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大などに延べ74人が合格。

◎URL

<http://partner.ed.kanazawa-u.ac.jp/kfshs/>



「経済の自由を手に入れた人々が次に求めたものは？」という問いかけから、社会権の学習に移った。当時としては先進的な社会権が日本国憲法には盛り込まれていることを、日本国憲法の条文を通して学んでいく。ノートは、スクリーンの丸写しではなく、要点や理解したことを自分なりに整理してまとめるように指示されている。



「君たちが持っている財産とは？」と、生徒に身近なことを思考の出発点として知的財産権の学習をスタート。先進国と発展途上国の立場の違いを示す中で、先生が問いを投げかけるだけでなく、生徒からも問いを引き出しながら、知的財産権を軸とした南北問題についても議論を深めた。

思考の活性化・深化への配慮

考や対話を促していく。黒板への板書は、生徒の意見をくみ取る場合など必要最小限にとどめ、あらかじめプレゼンテーションソフトで用意したものをスクリーンに映し出す。

特別な目的がある場合を除いてペアやグループでの活動を行わず、原則として全員で議論するのも特徴の1つだ。そのねらいを前田先生は次のように話す。

「生徒の思考をアクティブにできれば、全体で議論する方がより多様な考えに触れられますし、グループワークは、教師が生徒のよい意見を拾い切れないという側面もあります。一人ひとりが役割を持って参加できるというメリットがグループワークにはありますが、それは『総合的な学習の時間』など、ほかの授業で行うなど工夫しています」

前田先生は、赴任当初から上書きを重ねている授業の台本を基に問いの内容を精選し、授業に臨む。指導案も問いを柱に構成している。

「問いがなければ、学びではありません。まず私自身が疑問や不思議に感じたことを基に、生徒の思考を想定して問いを設定していきます。それが授業の幹となり、そこから派生するように生まれる生徒自身の問いで枝葉が形作られます」

もつとも、事前に設定した問いは、すべて用いるわけではなく、あくまでも生徒の発言をつないで構成していくため、クラスにより議論の内容も異なる。

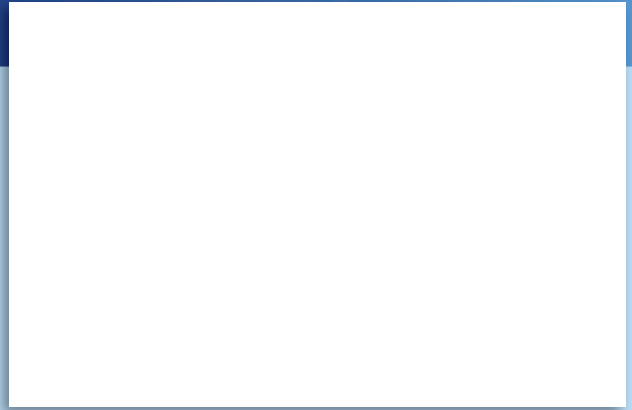
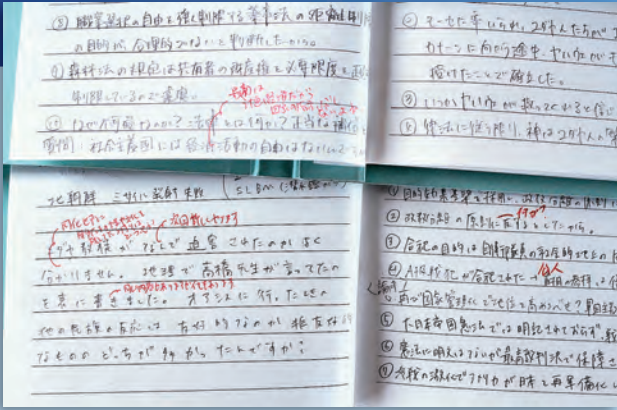
問いを与えるのではなく 生徒の内面から湧き出させる

問いは、前田先生が一方的に出すのではなく、あくまでも生徒の内面から湧き出るようにしていくことが指導の肝だ。そのため、授業展開は、具体的事例を通して「公正とは何か」「幸福とは何か」の考察を深めるものとなっている。

例えば、知的財産権の議論で、「新薬開発には巨額の費用がかかるが、特許権は守られるべきか？」と問いかけると、生徒の多くは「守られるべき」と答えた。続いて、「先進国と発展途上国は新薬の開発力に大きな差がある。それでも守られるべきか」というケースを提示。それに対してある生徒は「ルールだから仕方ない」と答えたため、前田先生が「貧しいのは仕方ない」と言っているのと同じ。納得できる？」と返す。別の生徒たちから、「特許の期間を決めたらどうなる？」「発展途上国は割引価格にしたらどうだろう？」などと声が上がった。前田先生は、「そういう案もあるね。公平ではない場合でどうフォローするとよいかをよく考えて」と、思考を一般化させる発問を行った。

教科としての知識も 議論を通して身につける

生徒が深く考えるためには、問いを持たせるだけではなく、思考の土台となる知識が欠かせ



貧困ビジネスが横行する現状などを整理し、「これから自分にできることを考えて実践してほしい」と先生。最後に、授業のポイントとなる問いの一覧を示す。生徒はそれらの問いへの考えなどをリアクションペーパーに記入し、先生に提出する。

社会権の1つ、生存権が焦点となった「朝日訴訟」「堀木訴訟」を提示。「人間として最低限度の生活とは?」「クーラーはぜいたく品か?」などと次々に問いが示され、「公正とは何か」「幸福とは何か」の考察を深めた。

生徒の声 ペーパーが小さく、それに合わせて書くうちに、考えや疑問を簡潔にまとめられるようになりました。

生徒の声 議論が深まるにつれ、現実社会の問題は、必ずしも皆が納得するような基準を設定できないことが分かりました。

前田先生は議論を活性化させるために、入学時から「間違ってもいいから、何でも発言しよう」と繰り返し伝えていく。それを実現するために、何より大事なことは、生徒の発言に耳を傾け、教

場づくりへの配慮 教師が生徒の発言を受け止めて リアクションすることの大切さ

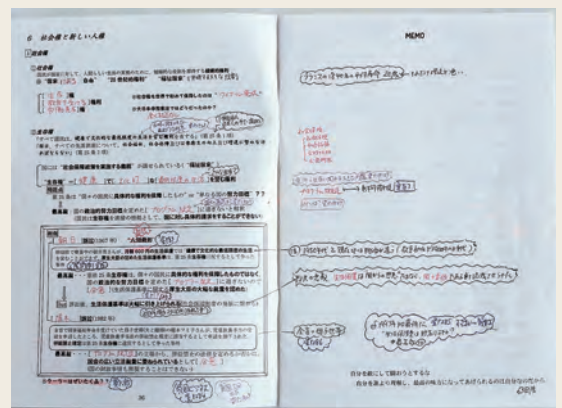
場づくりへの配慮

「私が教えるのではなく、生徒自身が考えた概念に言葉をあてはめていきます。そのようにして、自分の頭で考えながら学んだことは、単に暗記したことと比べてしっかりと定着します」
生徒は、思考を深めると同時に教科として学ぶべき知識も身につけていくのだ。

ない。前田先生は知識も一方的に教えるのではなく、生徒自身が考えて獲得するように促す。例えば、「社会権」には、生存権や教育を受ける権利、労働基本権が含まれることを理解させるために、前田先生は「健康で文化的な最低限度の生活を送っている人は?」と問いかけた。ある生徒が「文化的な生活って何だろう」とつぶやくと、別の生徒が「本を読めること」「スマホを使えること」などと発言。前田先生が「それをするためには何が必要?」と問いかけると、「お金」「知識」「教育を受けること」といった意見が出された。そうした発言を取り上げ、「そのために社会権として、労働基本権や教育を受ける権利が保障されているんだね」と述べた。

「どんな意見でも発してくれるだけでありがたいと考え、最大限に受け止めて、『しっかりと聞いている』という態度を示します。すると生徒は、『また発言しよう』という気持ちになります」
また、出席番号などでランダムに指名するように見せかけて、意図的に普段あまり話さない生徒をあてることもある。どの生徒にも発言の機会を与え、最初の一步を踏み出す手助けをする、多くの生徒が自ら話すようになるという。そうした工夫により、積極的に発言する生徒は増えていくが、あまり発言しない生徒もやはり存在する。そうした生徒の思考が活性化しているのかを確認するために、生徒が授業の最後に記入する「リアクションペーパー」を活用している。授業のポイントとなる問いの一覧を示

師がリアクションすることだ。



前田先生が7年前から使用している授業の台本。生徒のリアクションを踏まえて問いを再検討したり、時事トピックを追加したり、常時見直している。

授業デザインシート

【教科・科目】公民（政治・経済）

【設定時数】7時間中の4時間目

【分野・単元】日本国憲法で保障された人権

【本時全体の目標】主体的に授業に参加し、自由権や社会権に関する具体的事例を通して、「公正とは何か」「幸福とは何か」を考察し、思考力・判断力や基礎的教養などを身につける

【テーマ・作品】「自由権」の経済活動の自由のうちの「知的財産権」と「社会権」のうちの「生存権」まで

学習内容	自校の生徒の特性を踏まえた各学習内容における主な目標（身につけさせたい力・姿勢）	左記の力・姿勢の「学力の3要素」への分類	左記の力・姿勢を育むための指導内容	教師による発問・働きかけの内容	教師が特に観察・配慮すべき点
知的財産権	<ul style="list-style-type: none"> 主体的に授業に参加し、知的財産権について多面的・多角的に考察し、公正に判断する力。 議論を通して、他者の意見を受け入れる力。 知的財産権に関する基礎的教養。 	<ul style="list-style-type: none"> 知識 思考力 判断力 表現力 主体性 多様性 協働性 	<ul style="list-style-type: none"> 積極的な発言がしやすいように、普段からコの字型に席を配置している。また、どのような学習内容でも多くの「問い」を生徒たちに浴びせている。また、授業後のリアクションペーパーで、生徒の理解度や思考の過程を確認できるようにしている（1年間を通して）。 知的財産権については、先進国の観点のみで語りがちなので、発展途上国の視点からも知的財産権を考え、南北問題の解決方法の糸口を探らせる。 	<ul style="list-style-type: none"> 「本当に知的財産権は保障すべきか？」など、“当たり前”に対して疑問を投げかけ、深く考えるきっかけをつくる。 	<ul style="list-style-type: none"> 先進国の観点のみでの発言が予測されるので、左記の発問を通じて、発展途上国の視点からも考えることに自ら気づくようにする。
日本国憲法における社会権の規定	<ul style="list-style-type: none"> 日本国憲法における社会権についての基礎的教養を身につける。 	<ul style="list-style-type: none"> 知識 技能 思考力 	<ul style="list-style-type: none"> いかに当時先進的な内容であったかを条文などを通して読み取らせる。また、日本国憲法制定という背景を通じて、当時の日本における社会権への思いを感じさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> 「なぜ、日本国憲法に当時先進的な社会権の規定を盛り込んだのか？」 	
生存権	<ul style="list-style-type: none"> 主体的に授業に参加し、生存権について多面的・多角的に考察し、具体的事例について公正に判断する力。 議論を通じて、生存権に関する多様な価値観を受け入れ、「公正とは何か」「幸福とは何か」を考える力。 生存権に関する基礎的教養。 	<ul style="list-style-type: none"> 知識 思考力 判断力 表現力 主体性 多様性 協働性 	<ul style="list-style-type: none"> 生存権に関して、実際にあった具体的な事例を通して、多面的・多角的に考察させ、様々な価値観に触れる。常に「どうすれば人間としての最低限度の生活を保障することができるのか」を頭に置き、現実社会の問題解決の糸口を探らせる。また、社会保障の財源や貧困ビジネスなども交えて、課題の難しさを痛感させた上で、「法」や「制度」を整える以外にもどのような対策があるかも考察させる。 	<ul style="list-style-type: none"> 「人間として最低限度の生活とはどのような生活？」 「朝日訴訟における朝日さんの生活は人間として最低限度の生活？」 「国は具体的な線引きをすべき？」 「敗訴したら、意味がないのか？」 「堀木訴訟における堀木さんの主張は妥当か？」 「クーラーはぜいたく品か？」 「生活保護費は貯金できるか？」 「貧困ビジネスに対してどのような対策を取ればよいか？」 	<ul style="list-style-type: none"> 様々な意見が出るように配慮する。1つの意見しか出ない場合は、必ず違う意見を紹介し、その意見について反論を考えさせる。

*前田先生作成の授業デザインシートを編集部が一部改編

成果と課題

生徒の発言や記述に見られる思考力や表現力の高まり

し、生徒はそれらの問いへの考えや質問、感想を記入して提出。前田先生はすべてを確認後、添削して返却する。

「添削を通して、私の本気で読んでいることが伝わると、生徒も一生懸命書くようになります。リアクションペーパーは、授業研究の格好の材料にもなっています」

1年生の最初は視野が狭く、思考が凝り固まっている生徒が目立つが、授業を重ねるうちに多面的に思考し表現できるようになっていく。

「二番の変化は、誰かの発言を無批判に受け流さず、『ちょっと待てよ』と自分で考えられるようになることです。私が想定していなかった発言も次々に飛び出して、議論が面白くなります」

3年生になる頃には、リアクションペーパーの記述の質も格段に向上していく。

今後も、これまで以上に生徒の思考を促す授業を追究していきたいという。

「例えば、ある大きな問題を考えていくために、生徒自身がその時々に必要な単元を選んで学び、1年が終わると全単元を終えているという試みも検討しています。もっと生徒の好奇心や関心に沿うことで、生徒の思考を主体とした授業を構成していきたいと思っています」



生徒が班ごとに自作した問題は、事前にクラス全員が解いた上で作問した班に提出し、採点してもらう。この日の授業では、まずその採点された答案が返却され、解説を行う3つの班の代表者は解説の板書を進める。聞き役の班の生徒たちは、それぞれの班の解説を聞きに行くかを相談して分担を決める。

●2年次数学Ⅱの「指数関数・対数関数」の授業。
この日は、生徒が自作問題の解説を行う「級友の錬磨」の時間。解説を聞く側の生徒も、その内容をほかの生徒に共有することを通して、さらに議論や理解を深めていく。

生徒自身が作った問題の
解説を通して議論を深め、
真の理解と協働する力の育成を目指す

ICTを活用し、
授業の再設計に挑む

芝池宗克先生がアクティブ・ラーニングに取り組むようになったのは、従来の一斉授業形式では一定数存在する「数学が分からない」という生徒を救えなかったからだ。過去の授業観にとらわれず、授業のあり方を再設計する必要性を感じた芝池先生は、2010年頃から、ペア

芝池先生のアクティブ・ラーニング



大阪府・私立
近畿大学附属高校・中学校
芝池宗克 しばいけ・むねかつ

教職歴29年。
同校に赴任して15年目。2010年頃から協働学習に着手、13年度から反転授業を開始。

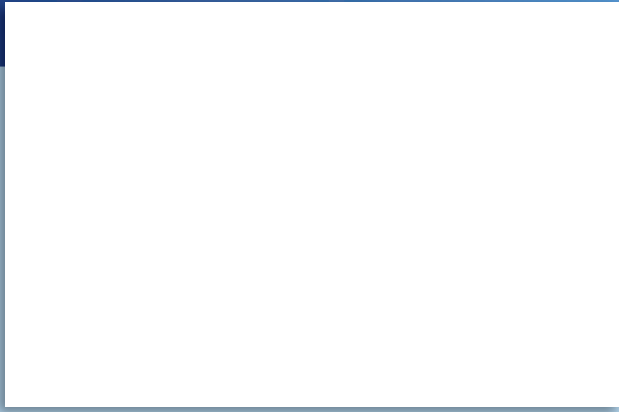
近畿大学附属高校・中学校

◎日本工業学校として設立、1949年に現校名に改称。2001(平成13)年に附属中学校と高校を統合。タブレットや電子黒板などで授業のICT化を推進。英語特化コースの設置、留学制度の充実など、グローバル教育にも注力する。

◎設立 1939(昭和14)年
◎形態 全日制/普通科/共学
◎生徒数 1学年約930人

◎2017年度入試合格実績(現浪計)
国公立大は、北海道大、筑波大、京都工芸繊維大、大阪大、大阪教育大、神戸大、和歌山大、広島大、九州大、大阪府立大、大阪市立大などに142人が合格。私立大は、近畿大などに702人が進学。

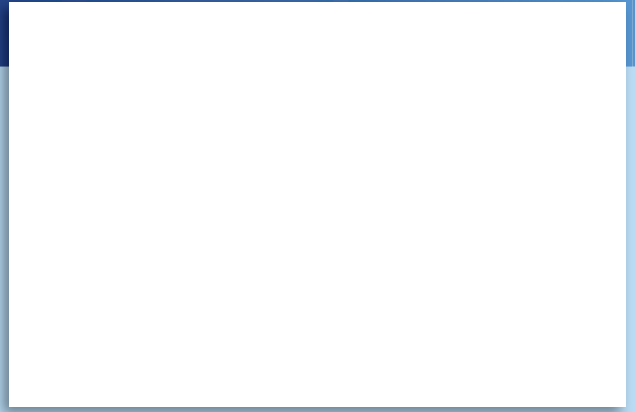
◎URL
<http://www.jsh.kindai.ac.jp/hs/>



芝池先生は、各班を巡回しながら解説に耳を傾け、議論を活発化させるための発問や発表の仕方などについてアドバイスすることに注力する。



発表は苦手でしたが、先生からもアドバイスもらいながら回数を重ねるごとに、少しずつ解説が上手くなってきているのを実感しています。



解説の時間は20～25分程度。解説役の生徒は、一方的な説明にならないよう、適宜、聞き役の生徒に質問を投げかけたり、考えを聞いたりしながら進めていく。



解説者がしっかり理解していなければ分かりやすい説明はできません。聞き役、解説者が同じクラスメートなので、質問しやすく、どちらも理解が深まるのを感じます。

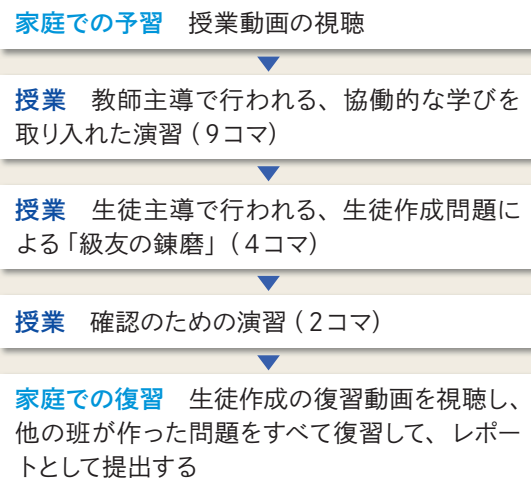
授業は、「教師主導の演習→生徒主導の協働的な学び→演習問題を用いた単元の振り返り」の3要素でデザインされる(下図参照)。「数学Ⅱ」の「指数関数・対数関数」(授業時数15コマ)を例に見てみよう。生徒は、単元に入る1週間ほど前から、10分程度の授業動画約10本を自宅で視聴し、内容をノートにまとめて、基礎的な問題や演習問題を解いて予習する。授業の最初の2コマで教科書の内容を一通りおさらいし、続けて7コマほどで、演習問題を使った授業が、芝池先生主導で行われる。ここでも、講義一辺倒ではなく、ペアやグループでの活動が多用される。生徒たちは、ここで知識の定着を図るだけでなく、この後の時間で行われる生徒主導の協働的な学びに向けて、芝池先生の発問の仕方や場づくりへの配慮の仕方を学び取っている。

自作の動画で予習させ 授業は演習と協働学習に充てる

やグループをつくって協働的に問題を解いていく授業スタイルを取り入れ始めた。当初は、「友だち同士で教え合うよりも、先生の説明を聞いた方が分かりやすい」という生徒の声もあったが、13年度、学校全体でのタブレット導入により、反転授業に取り組み始め、授業改善を一気に加速させることになった。

「教科書の内容を解説する動画を作成し、予習させることで、授業では演習や協働的な学びに時間を割くことができるようになりました」

■単元の基本的な流れ



思考の活性化・深化への配慮

自作の問題で思考を促す発問を 生徒が考える「級友の錬磨」

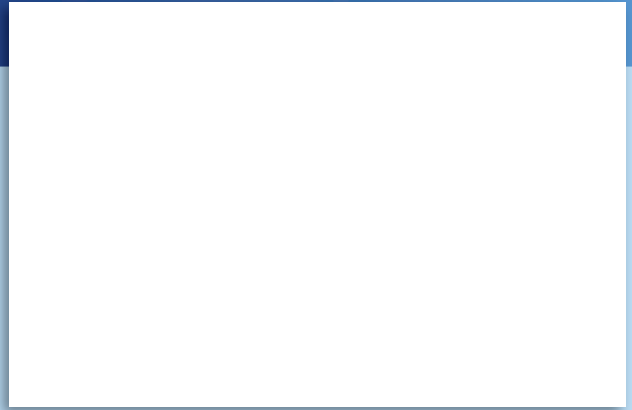
今回の単元では、10～13コマめが「級友の錬磨」

「演習を行う際、私から解説するだけでなく、『メタ認知ができるように、ペアで話し合ってみよう』、『原理原則に立ち返るために、定義をお互いに確認してみよう』など、時機や内容に応じて思考を深めるための声かけを行います。協働学習を取り入れた教師主導の指導は、単元理解の土台づくりであり、より高次の分析力、活用力を育むための学びの導入でもあります」

その高次の力を育む場が、次の3、4コマほどで設けられる「級友の錬磨」と呼ばれる時間だ。



全班の解説が終わると、聞き役の生徒は自分の班に戻り、それぞれ自分が聞いた解説の内容をほかの生徒にも共有する。自分の答案を見ながら、間違っていた部分について質問したり、確認したりしながら全員で理解を深めていく。この間も、芝池先生は机間指導を行いながら、議論を深めていくためのアドバイスを必要に応じて与えていく。



比較的難度の低い問題を扱った班の解説が、20分ほどで最初に終了。芝池先生は、解説役の生徒に、「今回の問題を解くためのポイントはどこにあるのか、皆がよく間違っていたところはどこか」と問いかける。また、聞き役の生徒には、「各班に戻ってどんな発問をするのか」と問いかけることで、さらなる思考を促す。



「級友の錬磨」の後、解説担当の生徒が制作した復習動画。単元に入る前の予習動画とともに、同校のポータルサイトにアップされる。

だ。事前に、生徒が3人一組の班に分かれてそれぞれ問題を作成、それらをクラス全員が解き、採点も作問を担当した班の生徒が行う。級友の解答を採点する中、「なぜ間違っているのか」「別解はないか」など他者の視点を借りて深く思考する。授業では、教室が大きく3グループに分かれ、解説担当班の代表者が各グループの前で解説を行う。一方的な説明だけでなく、質問を投げかけたり隣同士で考えさせたりするなど、聞き役の生徒の思考を促すファシリテーションも、解説役の生徒の仕事だ。解説を聞いた生徒は、自分の班に戻って、理解した内容を自分の言葉で解説し、共有する。ここでも、生徒が解説役と聞き役に分かれて議論し、理解を深めていく。「級友の錬磨」では、解説役の生徒が仲間の思考を活性化させる発問をできるかどうかが発

となる。解説役の生徒は、芝池先生主導の演習で、どのように思考を促せばよいかを体験的に学んでいるため、例えば、理解が難しい箇所や重要なところはわざと穴埋め形式で板書して置き、聞き役の生徒との対話を通して穴埋めしながら解説するなど、工夫を凝らす。また、芝池先生は、解説役の生徒の様子をつぶさに確認し、例えば、解説が一方的になりかけている時には「本当に理解できているかどうかを確かめてみて」となどと、思考を促す発問の仕方を指導する。それを受けて、解説役の生徒は、理解が追いつかなくなってきた生徒が出てきたと判断した時は、「隣同士で話し合ってみて」となどと全員が理解できるように配慮して進める。

「数学的な思考力だけに着目するならば、教師主導の演習の方が効果的かもしれません。しかし、『級友の錬磨』では、相手に分かりやすく伝える力、周囲の思考を促す力、発言を引き出す力など、社会人として必要な態度・能力を育む経験を積みます。発問の質を高めることで、生徒がお互いを深い思考の場に引き込み合い、教室がより真剣な学びの場になるのです」

場づくりへの配慮

協働の意義を浸透させ 活動の指標を明確に示す

芝池先生の授業では、生徒の主体性が欠かさない。そのため、芝池先生は事あるごとに社会

授業デザインシート

【教科・科目】数学Ⅱ

【設定時数】15 時間中の 10 時間目

【分野・単元】指数関数・対数関数

【本時全体の目標】生徒による問題解説、生徒同士の議論を通して知識をスキルに昇華させる

【テーマ・作品】章末演習（級友の錬磨）

学習内容	自校の生徒の特性を踏まえた各学習内容における主な目標（身につけさせたい力・姿勢）	左記の力・姿勢の「学力の3要素」への分類	左記の力・姿勢を育むための指導内容	教師による発問・働きかけの内容	教師が特に観察・配慮すべき点
問題ごとに3グループに分かれて生徒による解答・解説	「問い学ぶ」態度 生徒が作った問題を全員が解き、解説することで、単元内容の定着を図るだけでなく、思考力（分析する力、評価する力）、発表する力も育む。	<ul style="list-style-type: none"> 知識 技能 思考力 表現力 主体性 協働性 	<p>【生徒】1回の授業で3班が同時に解説を行う。一方的に説明するだけでなく、質問を投げかけたり隣同士で考えさせたりして、通常教師が行うようなファシリテーションを生徒が行う。</p> <p>【教師】グループ間を巡視しながら、解説者の発問は適当か、議論に参加していない生徒はいないか、解説内容に論理の飛躍はないかなどを確認する。</p>	解説担当の生徒には、聞き役の子の思考を促す発問の仕方、説明の仕方を指導する。	<p>解説者は多くの生徒が発表できるようにローテーションを組ませる。教師はすべての解説を聞くことができないため、授業開始直前の生徒とのやりとりなどを通して、事前に解説する生徒の様子を把握して、どのグループに注意を向けるべきか見当をつけておく。</p> <p>教師の役割は、すべて解説担当の生徒に委ね、説明を受ける生徒の思考が深まる発問ができてきているか、議論が深まる問いかけができてきているかという観点で机間指導を行い、解説者へのアドバイスを通して議論の活性化を促す。</p>
各班に戻り、解説内容を共有	聞いた解説内容をほかの生徒に説明することで、さらなる理解の深まり、発表する力の向上を図る。	<ul style="list-style-type: none"> 知識 技能 思考力 表現力 協働性 	【教師】議論が活発に行われているか、特定の生徒だけが議論に加わっていないかなどをチェックしながら机間指導を行う。	机間指導を行いながら、各班での解説内容の共有が表面的なものにとどまらないよう、班の中での説明の仕方などを指示していく。	生徒が主体的に動いているか、自分の役割を果たしているかを確認する。
演習内容の振り返り	解説の中身や議論の内容を踏まえて、もう一度個人で答案を振り返ることによって、より深い学びに向かう態度を養う。	<ul style="list-style-type: none"> 知識 技能 思考力 	【生徒】解説内容を班内で共有した後、添削を受けた自身の答案を振り返り、どこに問題があったのか、作問の意図はどこにあったのか、自分ならどのように問題をアレンジするかなどに思考を巡らせる。		個人で深く考える時間のため、あえて発問はしない。

*芝池先生作成の授業デザインシートを編集部が一部改編

成果と課題

生徒同士でオープンに議論し合う雰囲気定着

で求められる態度・能力を養う協働的な学びの意味や、クラスの仲間が切磋琢磨することで真の友情を育むという、いわば学校の本質的な価値などを生徒に説明する。また、「級友の錬磨」では、聞き役の子が受け身になってしまわないよう、聞き役の子が解説役の子を評価するルーブリックを作成している。解説役・聞き役どちらの子も、どのような観点を重視して授業に臨めばよいかを理解して参加するようになった。

芝池先生の受け持つクラスでは、16年度のベネッセの進研模試1年次1月の偏差値が前年より3・5ポイント上がった。だが、芝池先生がそれ以上に成果を感じているのは、作問・採点を通して生徒同士が真剣に議論する姿が日常に見られるようになり、対話を通してともに考える雰囲気定着している点だ。

一方、課題は生徒のタイムマネジメントだ。「予習動画の視聴や作問など、いろいろなことに取り組みさせているので、相応の時間が必要だ。他教科と連携し、バランスよく家庭学習ができることに配慮しながら、より効果的な協働的学びを実現していきたいと思っています」

〈参考文献〉芝池宗克・中西洋介（2014）『反転授業が変える教育の未来——生徒の主体性を引き出す授業への取り組み』明石書店

中西洋介（2017）「反転授業：アクティブ・ラーニング実現は『問い学ぶ』教育に道（よ）る」大学英語教育学会（JACET）関西紀要第19号 P.21-39

石川県・私立鵬学園高校

基礎学力向上

組織的な授業改善とICTの効果的な活用で、学びに向かう生徒を育成

変革のステップ

背景と課題

- 部活動の特色化により入学者数が増加する一方、学力に課題がある生徒も見られるようになったため、生徒の学力向上を目指し、指導体制を整備

実践内容

- 振り返り学習** 国語・数学・英語で義務教育段階の学習内容の学び直しを行う
- 45分授業** 授業時間を従来の50分間から45分間に変更。その対応策は各教師が考えるようにすることで、授業改善への意識づけを図る
- ICTの活用** ICTを活用して授業の効率化を図り、生徒が協働学習を行う時間的余裕を確保。板書を行わない「ノートレス授業」も実現
- 小論文指導** 3年間の段階的なカリキュラムを作成し、全校体制で取り組む

成果と展望

- 生徒に基礎学力が定着し、模試などの成績が向上
- 2017年度からは、生徒の「考える力」「書く力」「話す力」の向上を指導改革の軸に据え、さらなる授業改善を推進していく

PROFILE



七尾女子高校として開校。1990年に共学校となった。「清廉・積極・全力・感謝」を生活目標とし、何事にも積極的かつ全力で臨む人材育成に力を入れている。女子バスケットボール部やサッカー一部が全国大会に出場するなど、部活動も盛ん。

設立 1963 (昭和38) 年

形態 全日制 / 普通科・調理科 / 共学

生徒数 1学年約150人

2017年度進路実績 (現役のみ) 国公立大は、都留文科大に1人が合格。私立大は、金沢星稜大、神奈川大、京都産業大、立命館大などに延べ50人が合格。短大、専門学校進学56人。就職31人。

住所 〒926-0022 石川県七尾市天神川原町ハ32

電話 0767-53-2184

Web site <http://www.ohtori.ed.jp>

客観的な学力指標を基に、教師間の意識共有を図る

石川県の能登半島東部に位置する鵬学園高校は、普通科を擁する私立高校としては地区唯一の高校だ。生徒の多様な進路希望にこたえる学校として、地域から信頼を得ている。そうした同校は、少子化に伴う入学者数の減少に歯止めをかけるため、2011年度に部活動の特色化を図り、施設の増設や指導者の増員を行った。その結果、多くの部活動で実績が向上し、それに魅力を感じて入学してくる生徒が増加した。一方、生徒の学力層の多層化が進み、基礎学力に課題がある生徒も見られるようになった。そこで、14年度、生徒の学力向上を目指して指導改

善に着手した。上坂俊就教頭は次のように語る。

「基礎学力は社会で生きる力の根幹であり、生徒の希望進路の実現を大きく左右します。学習指導を改善し、生徒や保護者の信頼に応えたいという思いがありました」

その第一歩として、生徒の学力を定期的に測るため、ベネッセの「基礎力診断テスト」(*1)を導入し、全学科・学年の成績を職員会議で共有。定着に課題がある分野・単元を洗い出して指導に反映させることにした。さらに、教師間の目線を合わせるために、GTZ(*2)がDゾーンの生徒は進学・就職ともに厳しいという全国的な傾向があることも、上坂教頭が職員会議で繰り返し説明した。

「指導改善を実りあるものにするためには、学校が一丸とならなければなりません。そこで、生徒にとって学力向上が切実な課題であ

ることを、客観的な指標を用いて先生方に示しました」(上坂教頭)

学び直しを徹底し、生徒に基礎・基本を定着させる

15年度には、2つの取り組みを始めて改革を本格化させた。1つは、国語・数学・英語の義務教育段階の学習内容を学び直す「振り返り学習」だ。各教科で指導方針を立て、教材も作成した。例えば、国語では授業中に漢字テストを行い、合格点に満たなかった生徒は放課後に補習を受ける。ここでは教師からの声かけを重視している、国語科主任の杉森章子先生は話す。

「義務教育段階の漢字の読み書きはあらゆる教科・科目の基礎であることを伝え、『しっかり身につけよう』と呼びかけています。それにより、生徒に根気よく取り組もうとする意欲が生まれると考えています」

もう1つは、45分授業だ。授業時間を従来の50分から5分間短縮し、生徒が授業に集中しやすくなるようにした。そこには、教師の指導改善への意識を高める意図もあった。

「45分授業にいかに対応するかを先生方がそれぞれ検討することで、自身の授業を見直すきっかけにもなればと考えました。指導の工夫により、授業は多様になります。従来の一斉指導に加え、グループワークなども取り入れるようになれば、生徒の学習意欲の向上にもつながると期待しました」(上坂教頭)

ICTの活用を推進し、生徒の学習意欲を高める

16年度からは、ICTを用いた指導改善に力を入れている。その準備は15年度から始め、上坂教頭らが県内外の先進校を視察し、各校の取り組みを校内で共有してきた。

ICTを重視する目的は、生徒の興味を学習により強く引きつけることと、効果的なアクティブ・ラーニングを実現することにある。例えば、杉森先生が担当する「現代文」の授業では、学習内容への導入として、教科書の文章に関連する動画を各単元の冒頭で示す。また、評論の単元においては、生徒が内容を要約した資料を、プロジェクトで投映して発表し、それに基づいて生徒同士が話し合いを行う。

「45分授業に対応するため、私は授業の組み立て方を見直しました。それが、ICTの活用との相乗効果を生み、授業の充実につながっていると感じます」(杉森先生)

「Classi」(*3)も、多くの教科・科目で活用している。調理科では、生徒が長期休業中の課題として調理を行うが、そこで作った料理を写真に撮り、Classiにアップロードするように指導した。生徒は互いの料理の写真を見て刺激を受けていると、調理科の坂下文先生は述べる。

「課題に取り組んでいなかった生徒は、早く仕上げた友人の写真を参考にして調理を工夫したようです。また、友人の写真に『上手



上坂俊就 上坂俊就 上坂俊就 上坂俊就



杉森章子 杉森章子 杉森章子 杉森章子



坂下文 坂下文 坂下文 坂下文

*1 GTZ (学習到達ゾーン) という指標で生徒一人ひとりの基礎学力の定着度と学習力、コミュニケーション特性 (自我同一性) を測る、ベネッセの生活・学習指導用テスト。
*2 学習到達ゾーンのこと。ベネッセのテストにおける共通の学力評価指標。「S1」～「D3」の15段階がある。
*3 株式会社ベネッセホールディングスとソフトバンク株式会社の合併会社であるClassi 株式会社提供、学校教育でのICT活用を総合的に支援するサービス。

レジュメ1枚につき、学習の重要なポイントを1~2点に絞って掲載している。また、生徒に歴史の流れをしっかりと捉えてほしいと、紙芝居のようにストーリー性を重視して記述・構成している。

*同校の資料を一部抜粋して掲載

これにより、授業に集中してしっかりメモを取り、教科書をよく読む

だね』『私も負けないよ』といったコメントを書く生徒も目立ちました。友人からすぐに感想がもらえるので、生徒はうれしかったと思います。さらにうまく作れるように、課題に再挑戦する生徒もいました」

17年度は、授業で教師が調理する様子を動画で撮影し、配信していくことも検討中だ。

「生徒が復習しやすい環境を整え、知識・技能の定着を支援できるように、ICTを活用していきたいと考えています」(坂下先生)

上坂教頭は、担当する「日本史」で「ノートレス授業」を推進している。これは、板書を行わず、プレゼンテーションソフトなどで作成したレジュメ(図1)をプロジェクトで撮影して進める授業だ。レジュメには、重要な用語や

人物、事件といった学習の核となる情報のみを載せ、人物同士の相関や事件の背景などは上坂教頭が口頭で解説。生徒には、必要に応じて解説を教科書に書き込むように伝えている。ノートを持参するかどうかや、レジュメの内容を書き写すかどうかは生徒の自由としている。授業後には、レジュメをPDF化してClassiにアップロードし、生徒がいつでも手軽に読み返せるようにしている(写真1)。

上坂教頭は、以前は生徒に伝えたい内容をすべて板書していた。そのためか、多くの生徒はノートを中心に学習し、教科書をあまり読まなかったという。

「生徒が自分で調べ、考える習慣を身につけられるよう、与える一方の授業を改められないかと考えていました。ICTを活用した指導の試みとして、先生方の参考になればという思いもあり、『ノートレス授業』に踏み切りました」(上坂教頭)



写真1 通学の電車やバスの中、自習室などでは、レジュメのPDFをスマートフォンで参照しながら復習する生徒が多く見られる。スマートフォンは、教師に申請し許可を得れば、校内でも使用できる。

生徒が次第に増えていった。

「生徒は、ただレジュメだけを読み返しても、出来事の因果関係がよく分からないことに気づいたようです。歴史の『なぜ?』に意識が向き、自分から答えを見つけようとする知的好奇心が生まれてきていると感じています」(上坂教頭)

また、板書をやめたことで授業時間に余裕が生まれ、動画などを交えてじっくり解説したり、生徒同士が学びを深める機会を設けたりできるようになった。例えば、戦国時代の単元では、関連するテレビの教養番組を見ながら、生徒が時代背景などについて話し合った。

「定期考査には、生徒が授業で見た動画から気づいたことや興味を持ったことなどを記述する問題を出しています。しっかり書ける

生徒が多く、平均点も向上しました。生徒の学習意欲の高まりを実感します。当初は『板書をしなくて生徒がついてくるだろうか』という不安がありました。今では『ノートレス授業』に切り替えてよかったと思っています」(上坂教頭)

教師が互いに授業を見学し、よりよい指導を追究

新しい指導の工夫を学校全体で共有するために、「互見授業」も重視している。これは、同校の伝統的な取り組みで、全教師が互いの授業を年1回以上見学し合い、事後に見学者が感想などを授業者に伝えるというものだ。

「互見授業」は指導改革の進展とともに活発になり、15年度は「45分授業への対応」、16年度は「ICTの活用によるアクティブ・ラーニングの推進」を共通テーマとした。

「意欲的に授業改善に取り組む先生の授業を見学すれば、新たな気づきが得られ、自身の授業改善につながります。授業者も、見学者の感想から、新たな工夫のヒントが得られます」(杉森先生)

段階的なカリキュラムを作成し、学校一丸で小論文指導を実践

生徒の「書く力」の向上を目指し、小論文指導にも力を入れている。

従来は推薦・AO入試対策として3年生に

行っていたが、16年度は対象を全学年に広げ、先進校の取り組みを参考に段階的な指導カリキュラムを作成した。1年生では、文章の型をしっかりと身につけられるように、新聞記事を書写・要約し、記事に対する感想を書く。2年生では、「選挙権年齢引き下げ」「小学生の携帯電話所持」といった共通テーマを設けてその是非を述べる。3年生では、課題文を読み、筆者の主張に対する自分の考えを指定字数で論理的に述べる練習を重ねる。添削は学年団の全教師が手分けをして行い、生徒一人ひとりにコメントを書いて返却する。こうした体制に改めた当初は、指導に消極的な教師も見られたが、今では多くの教師が熱心に取り組んでいる。

「定期的に生徒の文章を添削していると、句読点の使い方や主語・述語の呼応などが次第にしっかりとってくるのがよく分かります。生徒の書く力の伸びを実感できることで、先生方が小論文指導に前向きになっていったのだと思います」(杉森先生)

生徒一人ひとりに応じた指導で、地域の期待に応えていきたい

一連の指導改善の成果は、生徒の学力に表れている。例えば、国語では漢字や語彙が定着し、しっかりと読解できるようになった生徒が増えている。「日本史」の定期考査の成績向上は、前述した通りだ。また、「基礎力診断テスト」においては、GTZがDゾーンの生徒が減少して

おり、基礎学力の定着がうかがえる。そして、こうした生徒の変化が原動力となり、教師の指導改善も一層進んでいる。

今後は、生徒の「考える力」「書く力」「話す力」のさらなる向上を目標に据え、アクティブ・ラーニングの充実を図っていく。

「社会に出れば、生徒は様々な課題と向き合うことになるため、状況に応じて自分で考えて工夫する習慣を、高校時代に定着させた」という思いがあります」(坂下先生)

例えば、生徒が文章を書く機会を各教科・科目で設け、小論文指導と相補的な取り組みにしていくことや、部活動の活動日誌を小論文指導に活用していくことも検討している。

「部活動の活動日誌の文章は生き生きしており、生徒は大好きなことについて書けば、しっかりと自己表現ができることがよく分かります。授業外にも視野を広げ、指導を工夫していきたいと思っています」(杉森先生)

同校は、地域の少子化が進む中、入学者数を増やしている。地域からの期待に応え続けるためにも、指導改善を継続し、生徒の生きる力を高めていく必要があると、上坂教頭は語る。

「生徒が変われば課題も変わるため、指導には改善を重ねなければなりません。管理職には、全国の学校の先進的な取り組みを視察し、先生方にアイデアを示す使命があります。今後も、生徒一人ひとりに応じた指導を全校体制で進めていきたいと考えています」

3年間を見通した指導で、生徒の学習習慣の定着と進路意識の向上を図る

変革のステップ

背景と課題

- 遅刻が目立つなど、生徒の生活面に課題があった。また、入学後の生徒の学力に低下傾向が見られた

実践内容

- 正門での声かけ指導** 教師が毎朝正門に立ち、登校してくる生徒に声かけ
- アセスメントや模試の活用** 生徒の学力・学習状況を定期的に把握するため、アセスメントや模試を活用し、1・2年生への進路指導を強化
- 「枚高マップ」「教科スタンダード」「大学入学共通テスト（仮称）」への対応として、3年間の指導を可視化し、教師の目線合わせを徹底**
- 授業改善** ICTの活用を推進し、アクティブ・ラーニングを充実

成果と展望

- 生徒の生活態度や学びに向かう姿勢が改善され、地域から評価される学校へ
- 生徒の進路意識が向上し、志望校決定時期が早期化した
- 教師の連携が強化され、指導方針の統一が進展

PROFILE



大阪府枚方市内で最初に設立された府立高校。教育方針として「自主・自律」「誠実・勤勉」「清新・進取」を掲げる。国際交流に力を入れ、夏季休業中にオーストラリアでの語学研修を行うほか、世界各国からの留学生も受け入れている。

設立	1963（昭和38）年
形態	全日制／普通科・国際教養科／共学
生徒数	1学年約330人

2017年度入試合格実績（現浪計） 国公立大は、三重大、大阪教育大、大阪市立大などに6人が合格。私立大は、同志社大、立命館大、関西大、関西学院大などに延べ605人が合格。

住所	〒573-0027 大阪府枚方市大垣内町3-16-1
電話	072-843-3081

Web site <http://www.osaka-c.ed.jp/hirakata/>

生徒の変化を目的のあたりにし、教師の連携が強まった

大阪府立枚方高校は、2007年度頃から段階的に指導改善を推進している。

最初に取り組んだのは、生徒指導だ。以前は、生徒の自主性を尊重するといった文化が強く、体育祭や文化祭といった行事には全生徒が熱心に取り組む半面、遅刻が目立ち、授業態度にも課題があった。そのためか、入学後に成績が低下する傾向が見られ、地域からも厳しい目で見られていたという。そこで、生徒部の教師が毎朝正門に立って登校してくる生徒に声をかけるなど、きめ細かに指導することにした。すると、2～3年ほどで遅刻が大幅に減り、授業態度も

落ち着いてきた。生徒部長の藤本信吾先生は、次のように振り返る。

「教師が生徒の変化を実感したことで、生徒部以外の教師も進んで正門に立つようになりました。提出物にも統一した方針を設けて指導し始めるなど、教師間で力を合わせようという雰囲気が強まったと感じています」

また、部活動の活性化も目指し、生徒の参加を奨励した。部活動の実績向上も追い風となり、以前は6割に満たなかった加入率が、数年後に



大阪府立枚方高校校長
松浦 正明 まつら まさあき

教職歴34年。同校に赴任して2年目。「生徒一人ひとりを成長させ、将来の夢に近づけるよう導いていきたい」



大阪府立枚方高校
前出 和彦 まえで かずひこ

教職歴32年。同校に赴任して9年目。首席保健主事。「奇跡を願うより、努力の軌跡を残す」



大阪府立枚方高校
富田 哲司 とみた てつじ

教職歴32年。同校に赴任して15年目。進路指導主事。「小さな『疑問』や『気づき』が生まれる授業を心がける」



大阪府立枚方高校
藤本 信吾 ふじもと しんご

教職歴13年。同校に赴任して10年目。生徒部長。「いつも若い気持ちで生徒と接するよう心がけている」



大阪府立枚方高校
東 大介 あずま だいすけ

教職歴6年。同校に赴任して7年目。将来構想委員会委員長。「生徒にとって充実した3年間になるよう指導を工夫したい」

は7割以上になった。それとともに、上級生の生活態度を見習う下級生が増え、規律のある学校生活を送るようになった。

「生徒の中に、学校中心の生活を大切にする意識が根づいてきました。教師間の連携も進み、全校を挙げて指導を見直していく環境が整ったと思います」（藤本先生）

生徒の学力・学習状況を把握し、進路への意識づけを重ねる

次に強化したのは、生徒の実態把握だ。学力や進路意識の変化を客観的な指標で測ろうと、アセスメントや模試の活用を工夫し、特に1・2年生への指導を重視することにした。例えば、ベネッセの「スタディーサポート」の結果を実施回ごとに分析して、改善点を洗い出し、指導に反映させた。1年生では学習状況の把握に力を入れ、平日60分間の家庭学習時間を目指した。進路指導主事の富田哲司先生は、こう述べる。

「学習習慣は学力向上の基盤となるものだから、低学年のうちにしつかり定着させなければなりません。スタディーサポートを通して実態を定期的に把握し、課題のある生徒には日頃の声かけや面談などで個別に対応しています」

G T Z（*1）は全校共通の学力指標とし、2年生では「半数以上の生徒のG T ZをB2以上にする」といった到達目標を掲げた。

進路への意識づけというねらいもあり、大学

進学希望者には全学年でベネッセの「進研模試」を受験するように伝えている。模試の受験日と部活動の練習や試合が重なった場合には、うまく調整するように部活動の顧問から生徒に呼びかける。首席で保健主事の前出和彦先生は、次のように語る。

「部活動の顧問には、学年主任や分掌長を兼務している教師もいます。模試と調整する方針は、複数の顧問からの提案でした。生徒の学力向上を目指し、部活動でも協力体制を強化しようという意思の表れだと思っています」

受験後には、ホームルームや学年集会の時間を中心に、振り返りを行う。以前は事後指導の時間確保が思うようになかったが、それに課題意識を抱く教師が増えていき、次第に充実させていった。卒業生へのアンケート調査では、模試を受験した効果として、「入試を想定した時間配分の練習になった」「志望校選びの参考になった」といった回答があり、生徒がうまく模試を活用していたことがうかがえる。

3年間の指導の流れを可視化し、教師の目線合わせを徹底

大学入試改革への対応も最重要課題と位置づけ、現在では「大学入学共通テスト（仮称）」（以下、同テスト）に向けた教師の目線合わせに力を入れている。主導しているのは、「将来構想委員会」だ。元々は国際教養科の特色化を目指して設けられた会議体であったが、次第に学校

*1 学習到達ゾーンのこと。ベネッセのテストにおける共通の学力評価指標。「S 1」～「D 3」の15段階がある。

全体の指導を検討する場へと発展していった。松浦正明校長は、次のように話す。

「同テストの全貌が明らかになり次第、全教師が足並みをそろえて対策を立てる必要があります。そこで、若手教師を中心に7〜8人に委員を任せ、今のうちから指導を絶えず点検・改善できる体制の整備を進めています」
 例えば、15年度に完成した「**枚高マップ**」(図1)には、3年間に行う学習指導や進路指導、生徒指導の内容や目的、育てたい生徒像との関係性などを図式化した。その意図を、将来構想委員会委員長の東大介先生は次のように語る。

「指導の全体像を把握することで、課題の発見、問題の解決につなげたいと考えています。行事や部活動などにも有機的に結びつけ、本校ならではの教育の充実を図りたいという思いもありました」

作成にあたっては、大阪府教育委員会の指導主事を講師とする全4回の研修会を行った。7割近くの教師が研修会に参加し、一つひとつの指導について、目的や行うべき時期などを話し合ったり、課題や改善案などを書き出したりするグループワークに取り組んだ。将来構想委員会で、そうして出された様々な意見を集約し、形にしていった。試案ができると、職員会議で改めて検討し、加筆・修正を経て完成させた。

「意見のすり合わせを重ねたことで、どの先生にも納得してもらえものができたと思います。学校の教育方針についても、教科や

分掌の枠を超えて共通認識が深まったと感じています」(東先生)

16年度からは、教科指導の目線合わせとして「教科スタンダード」の作成も進めている。それは、各教科・科目の単元ごとの学習時期、生

徒の到達目標などの一覧で、教科団が合議して作成する。当初はシラバスのような詳細なものにする案もあったが、教師が状況に応じて工夫できるように、指導のポイントを中心に示すことにした。以前は、同じ教科・科目でも学年に



同校が掲げる3つの生徒像「確かな学力を身につけた生徒」「グローバルな視点で考え、行動する生徒」「豊かな人間性を持った生徒」に応じて指導を3系統に分類。1年生4月〜3年生3月まで、各時期の指導ポイントを明記している。
 *学校資料を基に編集部が一部改編

※1 「Computer Assisted Language Learning」の略で、コンピューター援助による英語学習。
 ※2 CLは「CALL」、Pは「Pair」、Sは「Solo」の略。
 ※3 大阪府外国語(英語)指導員。

よって授業内容や進度に違いが見られたことから、将来構想委員会が作成を提案した。全体で合意を得ることはなかなか難しかったが、粘り強く協力をお願いしたという。

「先生方の合意が形成されないまま、取り組みを進めることはできません。そこで、生徒のために教科指導を体系化する必要があることを先生方に直接伝え、理解が得られるように努めてきました」（東先生）

国語・数学・英語では16年度内に完成させて17年度からの活用を、その他の教科では17年度内に完成させて18年度からの活用を予定している。同テストを見据えた指導方針も明記して徹底を図り、例えば国語では、3年間を通して記述問題対策に力を入れることにしている。

「『書く力』の育成を通して、生徒の思考力・判断力・表現力を高めていきたいという思いがあります。そうすれば、同テストだけでなく、現行制度における大学入試にもしっかりと対応できると考えています」（富田先生）

生徒の生き生きとした様子が、教師の意識を変えた

ICTを活用した授業改善にも力を入れていく。指導ノウハウを全校で共有しようと、将来構想委員会の委員を始め、若手教師が公開授業を積極的に行っている。当初はICTの活用には戸惑っていた教師も、公開授業を見学したこときっかけに、次第に前向きになっていった。

「使い方を教えてもらい、できるところから始める先生が増えてきました。公開授業を通して機材の操作が簡単なことに気づき、自分にも使えそうだと感じたからでしょう。また、生徒の生き生きとした様子を目のあたりにしたことも、先生方の意識変化を促したと思います」（前出先生）

ICTの活用により、板書の時間などが効率化されることで、生徒が考えを深めたり、生徒同士がグループワークなどに取り組んだりする時間を、多くの教師が設けるようになった。今後は、アクティブ・ラーニングをさらに推進する予定だ。ベテラン教師にも公開授業を行うように働きかけていきたいと、前出先生は話す。

「効果的な発問や生徒の興味・関心を高める解説といった、ベテランならではの指導のコツを、若手の先生にしっかりと伝承してほしいと思います。そうすれば、ICTの活用との相乗効果により、授業がより充実していくと考えています」

全校を挙げての指導改善を今後も継続していきたい

段階的な指導改善の成果は、生徒の姿に表れている。例えば、第1志望校を一般入試で受験する生徒が増え、推薦・AO入試で合格した生徒も、資格試験の学習などに自主的に取り組んで大学入学後に備えている。前述のように生徒の生活態度は落ち着いており、地域からの評価

も高まっているという。

「中学校を訪問すると、先生方から『御校は変わりましたね』とよく言われます。また、本校を志望した理由として、『勉強も部活動も頑張りたいから』と答える新入生が目立つようになりました」（富田先生）

また、16年度卒業生では、2年生のうちに志望校を決めていた生徒が65%いたが、それは過年度生に比べて約10ポイントの上昇で、進路意識の向上がうかがえる。

「枚高マップ」や「教科スタンダード」により、教師の目線合わせも進んでいる。例えば、地歴公民科では、以前は担当教師ごとに定期考査の問題を作成していたが、17年度から同学年では共通問題も取り入れることとした。

「先生方が話し合ったり、教材を共有したりする姿がよく見られるようになりました。互いの授業への理解を深めていけば、授業改善の原動力となると思います」（前出先生）

一方で課題として、1・2年生における家庭学習時間の伸び悩みが挙げられる。そこで、各教科・科目との連携をさらに密にし、学習課題の分量や出し方を工夫していく予定だ。

松浦校長は、今後について次のように語る。「本校は、全校を挙げて一歩ずつ取り組みを充実させ、少しずつですが着実に成果を得てきました。これからも、目の前の生徒、そして将来の生徒のために、先生方としっかりと力を合わせていきたいと考えています」

自校の指導ツールを他校の教師とともに検討し、各校の生徒特性に合った形へ改善を図る本コーナー。今回は、3年生が夏休みに向けて、学習の優先順位を見極めるための「弱点克服シート」について検討する。

7月末までの学習計画シート

自分の弱点(3つ)	弱点克服のための計画	
	具体的な教材名	いつまでにやるか

Before

高知県・私立土佐塾中学・高校
藤澤佑介先生提供

「3年生 夏休み前
弱点克服シート」

課題

- 1 多忙感や焦りなどから、何を優先的に学習すればよいか分からなくなってきた夏休み前の3年生に、今すべきことを整理させたい
- 2 担当教科以外についても、学習面で課題を抱える生徒を見つけ、担任が適切にアドバイスできる仕組みをつくりたい

検討メンバー



ツール提供者

高知県・私立
土佐塾中学・高校
藤澤佑介
ふじさわ・ゆうすけ



東京都立
青山高校
鎌田邦広
かまだ・くにひろ



長野県
屋代高校・
附属中学校
宇都宮 仁
うつのみや・じん

生徒、教師双方にとって
負担の少ないシートを目指す

3年生の担任を務めた際、すべきことが多く、空回りがちなこの時期の生徒が、学習の優先順位を整理し、夏休みに向けた学習習慣の確立につなげられるようにしたいと考え、この弱点克服のための学習計画シートを活用してきた藤澤先生。シートに書かれた内容を基に、個人面談を実施し、学習法をアドバイスしていた。記入の負担が大きくならないようにシンプルな書式としたが、生徒が記入する内容がまちまちだったこと、また、藤澤先生の担当教科である英語以外の学習法は、都度、教科担当の教師に藤澤先生が確認したため指導に時間がかかったことなど、改善の余地があると感じていた。

After

改良ポイント

1 教師からのアドバイスを基に、自己評価させる

教師からのアドバイスを指標に、現時点までの学習状況を生徒自身に「できたこと」「できなかったこと」の視点で振り返らせる。担任は、担当以外の教科で課題を抱える生徒を見つけやすくなる。

2 現時点までの成果と課題から優先順位を明確にさせる

教科バランスを意識させながらも、最も力を入れるべきことを明確にさせるため、現時点までの学習状況の振り返りを基に、教材名、強化する単元や分野、学習の優先順位を生徒自身に決めさせる。



弱点克服シート

- A すべきことを理解し、順調に学習を進めている
- B すべきことを理解し、学習に取り組み始めたところ
- C すべきことが分からない

	この時期に取り組みたい学習 (教師が記入)	現時点までの振り返り			8月末までの展望	
		今の学習状況の自己評価	すべきことのうち、しっかりできたこと	すべきことのうち、思い通りにできなかったこと	どの教材を使って、何を勉強するか(どんな力を伸ばすか)	優先順位
国語		A・B・C				
地歴・公民		A・B・C				
数学		A・B・C				
理科		A・B・C				
英語		A・B・C				

左記を踏まえての8月末までの学習のポイント

現時点までの成果と課題からすべきことをあぶり出す

教科バランスを考慮した、偏りのない学習を意識できるように、入試で必要となる教科について記述欄を用意した。また、各教科担当の教師が「この時期に取り組みたい学習」を述べたものを記載することで、生徒が、今どのような状態なのかを自己評価する指標とする案が出された。そして、各教科において、学習状況の自己評価を基に、現時点までの成果と課題を振り返ることとで、「夏休みに向けて取り組むべきことは何か」「どの教材を使って強化するのか」を生徒自身が明らかにすることとした。なお、このシートの位置づけは、これまで同様、記載事項を基にした面談を行って完結するものとした。

次ページでは、
3人の先生方の
検討の様子を
ダイジェストで紹介!



このマークのある図版は、加工可能なデータとして、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイト (<http://berd.benesse.jp>) からダウンロードできます。「HOME → 教育情報 → 高校向け → 生徒指導・進路指導ツール集」をご覧ください。

3年生 夏休み前 弱点克服シート



活用の流れ

- 1 あらかじめ、各教科担当の教師から学習アドバイスを収集し、まとめる
- 2 シートを配布。生徒は、現時点までの学習状況と成果、課題を自己評価
- 3 優先的に取り組む教科や教材、強化したいことを可視化する
- 4 シートの内容を基に面談を実施し、夏休みに向けた態勢づくりを行う

すべきことの中から
優先順位を明確化

受験の天王山である夏休みを有意義に過ごすためにも、夏休み前に自分の学習状況を確認しながら、たくさんのおすべきことの中から優先順位を自分で明確にすることは、いずれの学校においても重要であるとの認識で一致した。その上で「学校行事や部活動、日々の学習で忙しい生徒に負担はかけないものにしたがう」「計画通りにやれなかった時にそのこと自体に悩んでしまうことがないようにすべき」「書かせること以上に、面談で担任と語り合うことが重要」といった認識から、あれこれと詳細に書かせることなく、優先すべき事

項が明らかになるような書式とするこ
とになった。

生徒が自分の学習状況を把握し、優先順位を見極められるように、また担任が担当教科以外のアドバイスをしやすいように、各教科担当の教師から「この時期に取り組みたい学習」に関するコメントをもらうという提案があった。情報の受け手である生徒へのメリットはもちろん、学年団の教科間コミュニケーションの活性化や指導力の底上げも期待できるだろう。

そのほか、各学校の状況に応じて、第1志望校を宣言させたり、保護者からのコメント欄を設けたりしてもよいという意見が出された。

検討メンバーの先生に、自身の指導観や自校の生徒特性を踏まえて、
ツールの活用方法や留意点などをお話いただきました

「やらなくてもよいこと」を見極める手助けを

高知県・私立土佐塾中学・高校 藤澤佑介 ふじさわ・ゆうすけ



3年生といえども、この時期、自分の状況とすべきことを客観的に捉えるのは簡単ではありません。本校の3年生の多くは、7月には

学校行事も一段落し、気持ちの面では受験生への切り替えは済んでいます。自分が決めた学習の優先順位に「本当にこれでいいのか」と不安を感じ、やらなくてもよいことにまで手を出している生徒が少なくありません。ですから、生徒が自分を振り返り、軌道修正する機会として、このシートを活用した面談は重要な指導だと位置づけています。夏休みを前に、少し息切れし始めている生徒が、面談を通して「優先順位のつけ方」をこの時期に学ぶことは、夏休みの過ごし方をよりよいものにするはずですよ。

懸案だった自分の担当以外の教科のアドバイスについては、事前に各教科担当の教師からの「この時期の学習法と教材」などを別紙にまとめて、このシートと一緒に配布するのがよいと思いました。担当以外の教科の学習指導では教師の経験も問われませんので、別紙にまとめることで、経験の浅い教師のよりどころになると思います。

藤澤先生プロフィール 教職歴11年。同校に赴任して11年目。英語教科部長。「教師が伸びれば生徒も伸びる。チャレンジする姿勢を忘れない」学校プロフィール 全日制/普通科/共学/1学年約2000人/2017年度入試合格実績(現役のみ)/国公立大は、東北大、名古屋大、京都大、神戸大などに61人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、同志社大、立命館大などに延べ349人が合格。

学校行事に燃える生徒にマネジメント力を育む

東京都立青山高校 鎌田邦広 かまだ・くにひろ



本校は、8月末には文化祭があり、3年生は舞台づくりに取り組みます。校外から8000人の観客が訪れるイベントで、この舞台のために本校を志望した生徒もいます。私たちも文化祭をやり抜くことで受験生に切り替わるのだと見守っていますが、最低限すべきことを整理する自己管理能力も生徒には不可欠です。夏休み前には、受験生としての学習法の模索は済ませておく必要があります。学習に対する不安や悩みは、生徒自身が克服するものですから、このシートのように、自分の取り組んでいることを気軽に書くことができるツールを使って、面談で教師とともに整理することが大切です。

各教科担当の教師からこの時期の学習法をまとめる際、私なら、自分が聞き取ります。3年生の担任として教科担当の教師と生徒像をすり合わせながら書く方が、より生徒の実態に合った学習法が紹介できそうです。文系の先生に理数科目をどう克服したのかなど、あえて違う教科の先生に聞き取りしてもよいですね。

鎌田先生プロフィール 教職歴30年。同校に赴任して5年目。進路部。数学科。『目いっぱいやり切った!』そんな最高の笑顔で卒業してもらいたい。

学校プロフィール 全日制/普通科/共学/1学年約280人/2017年度入試合格実績(現役のみ)/国公立大は、東京大、東京工業大、一橋大、京大などに58人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、中央大、早稲田大などに延べ483人が合格。

保護者との連携を促進する機能も盛り込みたい

長野県屋代高校・附属中学校 宇都宮 仁 うつのみや・じん



本校の3年生もこの時期は文化祭、高校総体で忙しく、夏休みに向けて日々をどう過ごすかは重要なテーマです。多忙な中でも二兎、三兎を追うことで、社会に出て生かせる力に身をつけることができると生徒には伝えています。また、生徒を支える私たち教師は、生徒に詳細な計画は求めません。計画通りにいかずに苦しみよりも、何をやったかを振り返り、自信を持つことが重要です。ですから、学習状況を簡単に確認できるようにしたのはよいと思います。このシートと一緒に、各教科担当からの学習アドバイスを配布するのなら、既に学年通信などで発信している内容をまとめると、それほど負担なくアドバイスを作成できるでしょう。

本校でこのシートを活用する場合、保護者が担任への相談を書ける欄を設けるなど、「家庭との連携」の工夫を行いたいです。既に運用している保護者懇談用シートと併せて使い、子どもの状況や決意が分かるシートに保護者が目を通すことで、学校と一緒に子どもを支えるチーム化が進みそうです。

宇都宮先生プロフィール 教職歴27年。同校に赴任して7年目。キャリア教育係主任。国語科。「生徒の『直観』と『情熱』を育てていきたい」

学校プロフィール 全日制/普通科・理数科/共学/1学年約280人/2017年度入試合格実績(現役のみ)/国公立大は、北海道大、東京工業大、名古屋大、京大などに114人が合格。私立大は、中央大、早稲田大、同志社大、立命館大などに延べ279人が合格。

改良したいのに、どうすべきか分からない……

指導ツールを募集しています!

「改良! 指導ツール ビフォーアフター」では、取材にご協力いただける先生及び取材を検討させていただく「指導ツール」を募集しています。「自校で長年使っているツールを見直したい」「ツールのより効果的な活用法を検討したい」といった、課題意識をお持ちの先生方のご応募をお待ちしております。

〈個人情報の取り扱いについて〉をご確認いただき、必要事項①~④をご入力の上、指導ツールを添付して下記のe-mailアドレスにご送信ください。

※送信前に一度、生徒様の情報が削除されているかご確認をお願いいたします

- ①学校名・お名前
- ②分掌・ご教職歴
- ③ツールの内容(目的・活用時期・活用方法)
- ④ツールに対する課題意識、改善要望

view21_since-1975@mail.benesse.co.jp

〈個人情報の取り扱いについて〉 この「改良! 指導ツール ビフォーアフター」のツール募集でご提供いただく個人情報は、今後の企画を検討する目的で利用いたします。お客様の意思によりご提供いただけない部分がある場合、手続き・サービス等に支障が生じることがあります。また、商品発送等で個人情報の取り扱いを業務委託しますが、厳重に委託先を管理・指導します。個人情報に関するお問い合わせは、個人情報お問い合わせ窓口(0120-924721、通話料無料、年末年始を除く、9時~21時)にて承ります。(株)ベネッセコーポレーション CPO(個人情報保護最高責任者) 上記をご承諾くださる方はご送信ください。

に分かりやすく伝える経験を積むことができました」と、永沼瑞穂さんは語る。

2年次になると、8つの「プログラムの」の中から1つ選んで学びを深めていく。3年生の峯岸朋弥さんは、「私は『ネットワークシステム』を選択しました。『ウェブプログラミング』の演習では、実際のウェブサイトイメージして贈答品注文サイトを作りました。学んだことを形にすることの面白さを実感し、3年次の『プロジェクト』で自分が取り組みたい課題や履修したい科目も見えてきました」と語る。そのほかにも、新商品企画を立案したり、経営課題を分析したりして、実践的な内容を演習形式で学ぶ。

ビジネスに不可欠な協調性やコミュニケーション力を磨く

3年次にはよいよ「プロジェクト」で、研究・開発の共同作業を行う。「プロジェクト」の研究テーマは、学生も起案できる。仁木朋美さんも、テーマを起案した学生の1人だ。

「友人と3人で『動画と写真でオリジナル卒業アルバムを作るスマホ向けアプリケーションサービス』を

起案しました。2年次に、ウェブデザインなどの知識だけでなく、企画提案やシナリオ作成について学んでいたのが、企画内容を具現化するのに役立ちました」

また、担当教員や共同作業を行う学生の仲間も、自分たちで見つけなければならぬ。「小学生向けのプログラミング学習ソフトの開発」というテーマを友人と起案した峯岸さんは、メンバー募集に奔走した。「担当の先生から、同じ『プログラム』を選択した学生だけではよいチームにならないと助言を受け、自分とは違う『プログラム』の学生にも仲間に加わってもらいました」

8つの「プログラム」に分かれて学んだ学生が、「プロジェクト」では各自の能力を生かし、また足りない部分は補い合って1つのものをつくり上げる。その過程では、様々な困難があつたと永沼さんは語る。

「やる気がある人とそうでない人の作業量に差がつき、不満の声が出たこともありました。ただ、力を合わせなければ目標を達成できないため、各自の役割を明確にして作業を進めました。また、授業時間以外にも週1回空き時間に集まり、自宅に

帰ってからはネットミーティングでメンバーと進捗を確認しました」

「プロジェクト」を通して、実社会でも起こり得る困難を経験し、問題解決力はもちろん、ビジネスでも必要な協調性、コミュニケーション力などを身につけていく。

「プロジェクト」の学びで将来の目標を具体化させる

「プロジェクト」は、将来のビジョンを具体化するための場でもある。仁木さんも「プロジェクト」の成果物が学外のビジネスコンテストで認められ、就職にまでつながった。

「学外コンテストで入賞して、企業から商品化を提案され、現在は新サービスを共同研究中です。企業の目に留まったのは、企画力・開発力だけでなく、利用者目線やマーケティング視点も踏まえた企画書作りやプレゼンができたからだと思えます。これらはすべて2年次までに学んだことです。この経験をアピールし、若手でも企画開発に携われるIT企業に内定をいただきました。卒業演習では、『プロジェクト』の学びをさらに深め、就職後に生かしていきたいです」(仁木さん)

大学の思い

学内で学びを終わらせず
学外でも自信をつけさせる



ネットワーク情報学部
教授
松永賢次
まつなが けんじ

1年次から、実社会を意識した問題や課題を与え、知識を活用する場を提供しています。例えば、2年次の「インタラクティブデザイン」の演習では、お菓子のエクスペリエンスデザイン(*)をするという課題に取り組みます。学生たちは、お菓子の製造過程のデモンストレーションを見たり、パティシエの話を聞いたりしながら、お菓子と人との関係性を探り、チームで1つのデザインにまとめていくのです。また、学びを教室内や学内で終わらせないために、学外コンベンなどへの参加を推奨し、学生の目を外に向けさせることを心がけています。学生の中には、本学部が第1志望ではなかった学生も少なくないため、学外でも自分の力を試し、成長を実感できる機会を設けることで、社会に出る前に自信をつけさせたいと思っています。

「プロジェクト」で得た能力を自信を持ってアピールし、逆指名を受けて就職を決める学生も少なくありません。4年間の学びを通して、自分の強みを企業に売り込めるだけの力を身につけてほしいと考えています。

* 人工物(モノやシステム)の見た目や形状だけでなく、人と人工物の関係性を考慮しながらデザインすること。



4か月間のインターンシップ・留学を 経験させ、学び・考え続ける力を育む

就実大学 経営学部

厳しい経験のすべてが 自分の成長につながります

地元企業のメーカーでインターンシップを経験。企画書の締め切りに追われ、つらい思いもりましたが、コンペに貢献でき、自分の成長も実感しました。3年次以降の学びの指針にもなりました。(杉原さん)

企業を見る視点が 深く、シャープになりました

4か月いたからこそ、企業の表面的な印象ではなく、事業内容や仕事のやりがいにも目が向くようになり、自分が働くことをイメージしながら就職活動ができるようになりました。(杉原さん)



間違いを恐れず積極的に話すことで、 実践的な英語力が向上

留学先では、ディスカッションなどで自分の考えを発信する機会が多かったです。最初はうまく英語を話せるか不安でしたが、4か月間、周囲の学生が積極的に話す姿に刺激を受け、自信を持って話せるようになりました。(金さん)

就実大学経営学部では、2年次後期に4か月にわたるインターンシップ、または海外留学を経験する。社会や世界に目を向けさせることで、自分に足りない力に気づき、3年次以降の学びを充実させ、学び・考え続ける力を育むことがねらいだ。

同学部では2年次から、「リージョナル・ビジネス・マネジメントコース」(以下、リージョナルコース)、「グローバル・ビジネス・マネジメントコース」(以下、グローバルコース)のどちらかに所属する。

2年次後期でのインターンシップや海外留学を実りあるものとするた

2年次後期に4か月にわたる インターンシップ・留学を経験



経営学部経営学科4年
リージョナル・ビジネス・
マネジメントコース

杉原 範泰

すぎはら・のりやす
岡山県立瀬戸高校卒業。
メーカーでの勤務を志望。



経営学部経営学科4年
グローバル・ビジネス・
マネジメントコース

金 紅海

きん・こうかい
吉林省延吉市第三高級中学
卒業。日本での就職を志望。

めに、1年次から5〜6人の少人数ゼミで一人ひとりを丁寧指導し、大学での学び方やプレゼンテーション、ディスカッションの基礎などを学ぶ。英語教育にも注力しており、週4日、ネイティブスピーカーの教員によるレベル別の授業を実施している。

2年次は、グループワークを主とした経営学の専門分野の学習も行う。杉原さんはこう振り返る。

「グループワークの振り返りとして、レポートを書く機会が多く、苦労しました。ただ、3年次以降は、自分の考えを論理的にまとめられるようになり、1年次からの積み重ねが生きていることを実感しました」さらに、2年次のグローバル・コースでは、留学先の授業を想定して英語によるプレゼンテーションの方法も学ぶ。

インターンシップを機に 自分を見つめ直す

リージョナル・コースに進んだ学生は、岡山県内の企業・団体約50社の中から一企業で、インターンシップを経験する。杉原さんは大手学生服メーカーで、一社員として営業活

動に参加した。高校の制服コンペに向けては、企画書作成からプレゼンテーションまで行った。

「自信を持って上司に提出した企画書が何度も突き返され、厳しい指摘を受けて落ち込むこともありました。しかし、別のコンペに勝つた時には、『君の意見も参考になった』と言われ、自分が認められたようで本当にうれしかったです」(杉原さん)

杉原さんは、企画提案の難しさを実感し、市場の動向を踏まえてロジカルに提案する力身につけたいと考え、3年次からはマーケティングに関する科目を多く履修した。

「インターンシップ経験後、周囲の学生が、授業中に積極的に発言したり、グループワークでリーダーシップを発揮したりしていて、明らかに意識が変わっていることに刺激を受けています」(杉原さん)

留学を通して 英語力より大切な力に気づく

グローバル・コースに進んだ学生は、世界各国の提携校へ留学し、経営学を学ぶ。TOEICスコアや学業成績などを選考の条件にしており、全員が留学できるわけではない。

「入学前から日本以外のアジア諸国にも留学したいと考えていたのでも、目標点に向けて必死に勉強し、1年間でスコアが200点ほどアップしました」(金さん)

金さんは韓国・公州大学に留学し、現地の学生や留学生とともに国際金融学を学んだ。ここでは、英語力以上にコミュニケーション能力の重要性を痛感したという。

「留学先にはアジア圏だけでなく、世界中から学生が集まっています。多様な価値観の人がいる中で自分の意見を主張するためには、まず相手の考えを認めて、受容することが必要だと実感しました」(金さん)

留学を通して、多様性を認めて組織を動かす手法に関心を持ち、3年次以降は組織論や企業倫理学を重点的に履修。卒業後は、グローバルに展開する日本企業に就職するという目標もできた。

それぞれの学びを深める中で、学生が自らを振り返り、さらなる目標を定めて前進していく。同学部ではインターンシップや留学といった経験を軸としたカリキュラムによって、学生に学び・考え続ける姿が定着している。

大学の思い

経験から学ばせて 主体性を引き出す



副学長
経営学部 学部長
杉山 慎策
すぎやま・しんさく

本学部の学生の多くは、大学で学びたいことや卒業後の目標を生き生きと語ります。それはインターンシップや留学といった経験がきっかけとなり、自分に足りないことや学ぶべきこと、その先にある卒業後の自分についてしっかりと考えられるからです。

例えば、インターンシップは4か月間だからこそ、本格的に企業の職場に入り込み、正解が1つでない問いとじっくり向き合うことができます。その過程での試行錯誤を通して、学生は卒業までに何をすべきかを自ら考え、主体的に学び始めます。

また、留学した学生は、世界には多様な価値観が存在することを実感し、受容性や複眼的な視点などが身につけていきます。

体験と授業の学びに一貫性を持たせるために、教員が個別にフォローするなど、少人数教育ならではの丁寧なアプローチも本学部の強みです。今後も、岡山の地元企業に貢献する実地有用な人材はもちろん、国際社会で活躍する広い視野を持ったグローバル人材を育成していきます。

これからの会議・研修のあり方、つくり方

今、学校現場では、次期学習指導要領等に向けて、教師にも、「アクティブ・ラーニング」の視点に基づいた教師同士の日常的な学び合いが求められている。職員会議や教員研修などで、教師集団が知見を結集し、学校をチーム化させる具体策を、現場の声や実践事例を交えて紹介する。

監修 山口 寛

行政、教育機関、地域、企業など、様々な場で対話を促進し、構成員が主体的に課題に取り組む集団づくりを支援するファシリテーターとして活躍。津屋崎ランチ LLP 代表 / LOCAL&DESIGN (株) 代表取締役。

テーマ

自由な対話の場をつくる方法

このほかにもこんな声が…

- ・ 大人数の話し合いなのに、発言のチャンスはいつも同じ人に集中
- ・ 気軽に話す雰囲気につくれない
- ・ 昔は雑談の中からアイデアが生まれたのに……
- ・ ほかの教科や異なる世代の先生と話す時間が少ない
- ・ 若い先生が中心となる場をつくりたい

Case 2 若手が本音を語らない



「総合的な学習の時間」の検討委員会に20代教師が複数参加しています。「思ったことを自由に」と発言を促すのですが、「まだよく分かりません」といった態度で、一度も発言しないこともあります。若手ならではの意見を期待しているのですが……。(40代・男性)

Case 1 ベテランばかりが発言する



学年団の会議では、一部のベテランの発言が多くなりがちです。経験を通して培った知見を後輩に伝えようという気持ちはわかりますし、年長者の話は説得力もあります。だからこそ、なおさらほかの教師が発言しづらくなっているように感じます。(40代・男性)

現場の声より

現場の教師の体験から
現状と課題を探る

近年、「育てたい生徒像」や「これからの指導」について先生方が話し合う機会が増えています。それは、社会の変化を受けて教育のあり方が変わる中で、先生方にも、常識にとらわれず、経験や年齢を超えて、「10年後の自校の姿」「その実現のための教育」を自由闊達に話し合うことが求められているからです。そして、アクティブ・ラーニングや探究学習、ICTの活用、グローバル教育といったテーマは、教育環境の変化の中で生まれたものであり、これまでの経験だけを基にした対応では十分とは言えないでしょう。だからこそ、すべての教師が考えを自由に語り合い、深め合うような場が求められるようになってきています。

しかし、学校に限らず、どのような集団でも、通常の会議では立場や年齢、経験が勝る者が話し合いを過剰にリードしがちです。「ここは自由闊達な話し合いの場にしたい」という時は、会議・研修を企画・運営する者が、その場の全員が話しやすくなる環境を意図的につくる必要があります。その工夫の1つが対話の心得の提示です。

自由な話し合いには
配慮や工夫が必要

自由闊達に自分の考えを話し合える場をつくるのができたら、次はお互いの考えを深め合うことが大切です。特に、大勢から同意を得られる「正論」が出された時、それを安易に受け入れて議論を収束させることがないよう、**多角的に思考を深め合う方法**を取り上げます。

会議
運営の
配慮

自由な対話のための心得を提示する

話し合いを始める前に、司会・進行役が下記のような「心得」を参加者全員に提示します。その際、「ルールを守ることによるメリット」を参加者に説明することが重要です。

**断定・否定を
しないで!**

司会・進行役によるメリットの説明例▶▶ 「人は異なる意見を前にすると、自分の意見を押し通したり、他者の意見を否定したりしたくなる。しかし、自分だけが正しいと思いつまらず、『相手はなぜそう思うのか』と考えることで思考が深まる。ベテランが『自分と違う意見を聞きたい』と促すことで異論が出やすくなる」

**ひらめきと
沈黙を
歓迎しよう!**

司会・進行役によるメリットの説明例▶▶ 「意見は整理されていなくても構わない。ひらめきはほかの人の思考を刺激する可能性がある。特に若手は、考えがまとまらなくてもまずはつぶやこう。一方、話し合いで気づいたことを整理するには時間がかかる。お互いに発言を急がず、沈黙を見守り合うことも大切だ」

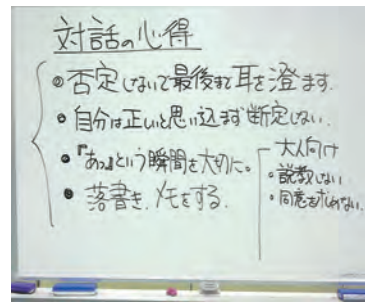
**時間は
全員のもの!**

司会・進行役によるメリットの説明例▶▶ 「時間はこの場にいる全員の共有物である。『自分が話している時は、ほかの人の時間を借りている時』と一人ひとりが自覚してほしい。1人だけが発言のチャンスを独占せず、たくさんの人に発言してもらいたい」

※「心得」の内容や数は、参加者に応じて変える（写真）

KEY-POINT **心得は全員の視界に入りやすい形で示す**

上記のような対話の心得は、口頭で説明しただけではなかなか参加者に定着しません。特に話し合いが盛り上がってくると、つい相手を説得したくなり、相手の話に耳を傾けるのが難しくなります。そこで、常に全員の目に入るような場所（ホワイトボードや黒板など）に「会議（対話）の心得」を明記しておきます。話し合いが始まる前に、心得を丁寧に説明することで、対話の姿勢が徐々に参加者に身につきます（右の写真は、高校の教師や自治体職員、研究者、学生が「教育と地方創生」をテーマに話し合った際に、ホワイトボード上で示した心得の例です）。



<学校現場の例>アクティブ・ラーニングについて学年横断で話し合った際に、「否定・断定しない」「異論と沈黙を歓迎する」といった心得が提示されました。黙っていてもよいし、まとまらなくても話してよいと司会に最初に言ってもらえたことで、『今回の会議はそういう場なのだ』と気持ちが楽になりました。普段は話をする機会がなかった他教科の先生とも気軽に話ができ、手法が違っても育てたい生徒像は実は同じだと分かり、うれしくなりました。(40代・女性)

**対話型の会議では自分の
考えの変化をよしとする**

会議の中に自由な対話をつくるためには、心得の提示に加え、自由な対話がこの場でなぜ必要なのかを、司会・進行役が説明することも重要です。

自由な対話の目的は、互いの価値観や経験をつなぎ合わせて、新しい気づきを得ることです。だからこそ、自分の経験やこれまでの常識にとらわれず、他者の考えに耳を傾け、必要であれば自説を変えることもよしとします。自分の意見を最後まで貫こうとする討論と、対話が決定的に異なるのはこの点です。討論が必要な場面は学校現場においてももちろん存在しますが、会議・研修が「対話型」であるべきだと判断した時は、司会・進行役が「これからの話し合いは、自分の気持ちや考えにできるだけこだわらず、むしろ、考えが変わることを歓迎しましょう」と明言してもよいでしょう。「心得」や「対話が必要な理由」を繰り返し伝えるうちに、会議・研修は少しずつ変わっていくはずです。

2018年4月、横浜市立大学に学部新設予定

ビッグデータ時代に注目の学問 「データサイエンス」とは？

モノとモノとがつながるIoT(*1)や人工知能の発達による第4次産業革命の結果、今後なくなる職業が多くあると言われる中、ますます重要性が高まっているのが、「データサイエンス」のスペシャリストだ。IoTから日々蓄積される膨大なデータの中から、必要なデータを見分け、結びつけて分析し、社会課題の解決や新たな価値の創造に生かしていく人材の育成が期待されている。データサイエンスを学ぶ学部を新設する横浜市立大学と、業務にデータを活用する企業に、データサイエンスの学問内容や求められる力などについて聞いた。

ICTの発展とともに 活用の気運が高まる

「第4次産業革命」と言われる現代では、社会の隅々までネットワークが行き渡り、多種多様な情報がデータ化され、蓄積され続けている。それは、数値で表される情報だけではない。SNSに書き込まれた文章、医療現場において内視鏡で撮影した画像、GPSで分かる移動経路など、すべての情報がデジタル化され、コンピュータに取り込まれている。

「データサイエンス」は、それらのデータを分析し、問題点を見つけて解決策に結びついたり、未来の動きを予測し、その対応に役立てたりといったように、課題解決や新たな価値の創造に生かしていくための知識・技能を身につけ、研究する学問だ。

2018年4月に首都圏初の「データサイエンス学部」を新設する横浜市立大学の窪田吉信学長は、こう説明する。

「今まで目に見えなかった情報も、ICTの進化によってデータ化され、大量に蓄積できるようになったことで、それらを活用しようという気運がここ数年で急速に高まりました。

横浜市立大学 学長

窪田吉信 くぼた・よしひさ

横浜市立大学附属病院副院長、学術院医学群長、副学長等を経て、2014年4月から現職。医学博士、専門分野は泌尿器科学。



データサイエンスは、今まさに社会に必要とされ、今後発展していく領域だと捉えています」

政策や公共サービスにも 活用されるデータ分析

データサイエンスのニーズ拡大は、従来からマーケティングなどでデータを活用していた企業だけの動きではない(図)。データサイエンス推進センター長の岩崎学教授は、その広がりを次のように語る。

「データは国民の共有財産であるとして、官庁や自治体におけるオープンデータ化が進められています。それらのデータは、政策や公共サービ

* 1 Internet of Thingsの略。スマートフォンやパソコンだけでなく、様々な物に通信機能を持たせ、インターネットに接続したり、相互に通信したりして、自動制御や情報収集などを行うこと。

スの立案・改善に活用されています。データサイエンスの専門知識は、企業の営利目的にとどまらず、社会課題の解決にも求められているのです」

例えば、医療統計学が専門の山中竹春教授は、自治体から救急医療に關するデータ分析の相談を受けたことがあると言う。

「大きな自治体では、救急車の出勤件数は年間十数万件に上ります。それらの出勤時刻、消防署から目的地まで、また目的地から病院までの経路と所要時間などのデータを記録し、分析すれば、救急車のニーズ予測を

立てることが可能です。救急車の適切な台数と配置場所を割り出すことで、よりよい救急医療に結びつけることもできます」

データサイエンスの重要度の高まりは世界的な動きであり、各国の教育もそれに対応している。岩崎教授が視察に訪れたアメリカの大学では、学生全員がデータサイエンスの基礎を履修する仕組みになっていたと言う。

「欧米では、データサイエンスを専門に扱う学部があるだけでなく、どの分野に進む学生にも必要な知識として学ぶようになりつつあります。



横浜市立大学 国際総合科学群 教授
データサイエンス推進センター センター長
岩崎 学 いわさき・まなぶ

茨城大学助手、防衛大学校助教授、成蹊大学教授等を経て、2017年4月から現職。理学博士。研究分野は、統計的データ解析の方法論と応用。日本統計学会会長。



横浜市立大学 医学部臨床統計学 教授
データサイエンス推進センター 副センター長
山中竹春 やまなか・たけはる

米国国立衛生研究所（NIH）、国立がん研究センター部長等を経て、2014年4月、横浜市立大学へ。理学博士。研究分野は、医学研究の計画や解析に関する統計的方法論の開発。

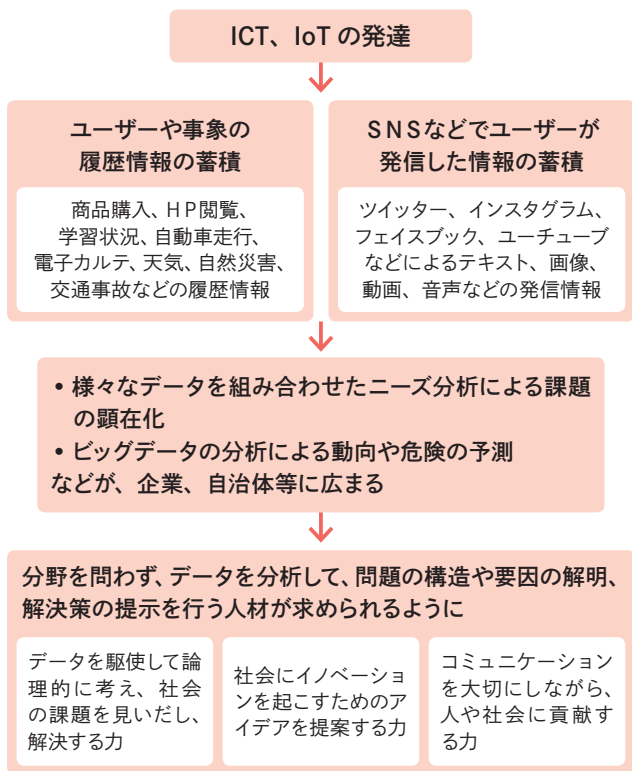
グローバル社会で海外の人々と伍していくためには、日本だけが遅れを取るわけにはいきません。データサイエンスの教育の普及は急務です」

「データサイエンスはデータを使って課題を解決する実学であり、そのデータを生み出しているのは『社会』です。社会を相手にする学問ですから、文系理系というくくりで捉えず、その枠組みを超えて学ぶことが重要だと考えています」

現場と連携したPBLで実践的な力を身につける
データサイエンスでは、データに真実を語らせるために統計学や計算機科学の基礎知識が必要となるが、それ以上に重要なのはイノベーションを起こす発想力や他者と協働でき

るコミュニケーション力であり、社会への課題意識や新しい価値を生み出したいという意欲が求められると、山中教授は強調する。

図 データサイエンスの活用のもと求められる人材



※横浜市立大学提供資料、取材を基に編集部で作成

*2 Problem Based Learningの略。課題解決型学習のこと。

首都圏の経済・産業活動のダイナミズムから生まれるビッグデータ、人口約370万人の横浜市から生まれるオープンデータなどの貴重な環境があり、その地の利を生かした実践的な学びを進めていきたいと言う。

「企業や自治体などから提供していただいた実際のデータを用いて、提供元と協働しながら課題解決に取り組んでいくような実践的な学びが重要だと考えています。現場で学ぶ中で、自分に必要な知識やスキルも見えてきますし、様々な人とのコミュニケーション力も磨かれていくでしょう」（山中教授）

データサイエンスは社会の課題と向き合う学問であり、そのためには、社会の様々なことに興味・関心を持つことが大切だと、岩崎教授は語る。

「データサイエンスの入り口となる学びは、小学校であれば夏休みの自由研究、中学校や高校では社会科の調査や理科の実験で、多くの生徒が経験しているはず。数値や情報を利用して、課題を論理的に解決していく面白さを感じた生徒に、ぜひデータサイエンスを学んでもらい、その成果を社会で生かして欲しいと思います」

データサイエンスの進展が 商品や仕事のあり方・進め方を変えていく

機器の管理やマーケティングに 不可欠な存在

山中 お2人の会社では、データをどのように活用されていますか。

相原 通信サービスの提供を主力事業とするNTTでは、データ活用は、主に3つ挙げられます。1つめは、通信設備の管理です。通信機器やネットワークの稼働状況を収集・分析し、異常の検知や故障予測をして、サービス運用・保守に利用しています。通信サービスが途絶えると社会的影響は大きいので、重要な役割です。2つめは、当社のサービスを利用されるお客様へのデータ分析サービスの提供です。例えばWiFiの導入店舗でのお客様のWiFi利用状況を分析し、店舗における販売促進活動の提案をしています。3つめは、当社のサービス利用者のデータを分析したマーケティングへの活

東日本電信電話株式会社（NTT東日本）
神奈川事業部 コラボレーション推進部長
相原 朋子 あいほら・ともこ
1992年NTT入社。映像通信システムの開発等を担当。99年NTT東日本入社後は、通信ネットワークの設計・構築、新サービスの開発等に携わる。



横浜マリノス株式会社 事業統括本部
FRM事業部 FRM&デジタルマーケティング課 担当部長
永井 紘 ながい・ひろし
2007年4月入社。チケットセールス、ホームゲームの企画・運営、ファンクラブマネジメント等を担当。



用です。

山中 まさにデータを生み出す企業として、データ活用の幅は広いですね。プロスポーツ界ではどうですか。

永井 海外にはデータ分析の専門家がいるチームもありますが、日本ではデータ分析の気運が高まり始めたところ。私たちのクラブでは、選手の走行距離の分析以外にも、チ

ケット販売やファンクラブの運営にデータを活用しています。ウェブサイトでご購入いただくと、購入者の性別や年齢層、居住地域、好きな選手などが分かるので、それらをホームゲームの企画・運営やチケットの販売促進活動に生かしています。また、選手の移籍に伴う観客動員数やファンクラブの会員数への影響も、

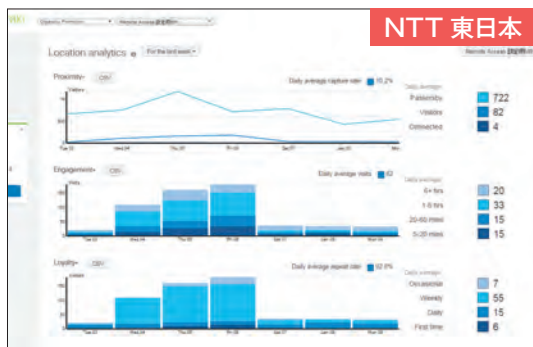


写真1 お客様の誘引や利便性向上のため、Wi-Fiを設置する店舗が増えており、来訪者のWi-Fi利用状況を分析して販売促進に活用するなど、データを基にした付加価値を提供している。



写真2 プロスポーツ界でも、マーケティングにデータ分析が活用されている。試合では、来場者にファンクラブ会員証をタッチしてもらって記録に残し、ファン層を分析して、ホームゲームのイベントの企画立案などに生かす。

蓄積したデータを分析して予測を立てています。ただ、まだまだ分析の精度が低いのが現状です。今後、データサイエンスの専門家が育成され、スポーツ界でも活躍してくれることを期待しています。

現場に根差した 数字を見る目を持つ

山中 データ分析を行う際に大切だと思われることは何でしょうか。

相原 データ分析のセンスだと思えます。データは相手を納得させる提案の根拠となるものであり、そのため、どのデータを抽出するか、デー

タをどう組み合わせれば何が分かるのかといった着眼点が肝になります。現場の知識と経験はもちろん、データサイエンスの専門性があってこそ持てるものだと思います。

永井 私は、扱っているのは数字でも、ファン一人ひとりを対象としていることを忘れてはならないと思っています。チケットの購入回数が多い方を抽出してシーズンチケットを宣伝しようとしたことがあるのですが、詳しく分析すると、その方なりのこだわりを持って席を選んでいることが推測できました。そうした方々に、こちらが指定した固定席のシーズンチケットを売り込んだら逆効果

です。データ分析は必ずしも機械的にできるものではないのだと痛感しました。

山中 データを単に分析するのではなく、データが発生する場の知識を持ち、その現場で求められていることを把握し、その場にいる人たちと対話しながら課題を解決していく姿勢が大切なのですね。

永井 もちろんデータ分析によって自動化される業務もありますが、人間にしかできない仕事もあり、今後そこには資源が集中投下されるようになると思っています。

課題解決に取り組む学問として 文理の両面が大切

山中 データサイエンスが、仕事のあり方も変えているようですね。私がかかわる医療界も、ビッグデータが医療行為や診断のあり方に影響を与えています。

相原 リスクマネジメントの手法も、SNSの普及で変わりました。例えば、新商品を出した時、SNSで「N T T」と一緒に使われている言葉を分析し、「使えない」「駄目だ」といった否定的な言葉が多ければ、すぐに

原因を探り、対策を取るといった具合です。今後、通信回線の高速化や人工知能の進化などにより、データサイエンスの可能性は一層広がると思います。

山中 本学はデータサイエンス学部を新設予定ですが、データサイエンスを学ぶ学生や志望する高校生にメッセージをお願いします。

相原 データ活用は、中小企業がまだ踏み込めていない領域です。地域の企業と学生が地域の課題と一緒に取り組んで解決するなど、大学に期待されることがたくさんあると思います。現場の課題を把握し、データ分析の手法を用いて解決していくためには、理系と文系、両方の要素が必要であり、ぜひ身につけてほしいと思います。

永井 データサイエンスだけではなくかもしれませんが、探究心を大切にしてほしいと思います。「何でだろう」と疑問を持ち、仮説を立て、正解を得る・得ないにわからず、追究を繰り返すことで、物事の本質をつかめると思っています。また、情報を鵜呑みにせず、背景や真偽を考えて見極める習慣を、高校生のうちからつけておくとよいと思います。

「全国スーパーグローバルハイスクール 課題研究発表会 2017 SGH甲子園」

概要

会場 関西学院大学西宮^{うえがはら}上ヶ原キャンパス

日時 2017年3月19日

プログラム及び参加校・チーム数

- プレゼンテーション / 25校 25チーム
- ポスター発表 / 77校 209チーム
- グループディスカッション / 1テーマ6人

テーマ1「日本が外国人労働者として移民を受け入れるにあたっての課題と解決策について」

テーマ2「日本の学校を9月入学化することの課題と解決策について」

テーマ3「日本における選挙権の18歳以上への引き下げについての課題と投票率を上げるための解決策について」



SPECIAL REPORT

特別レポート

「SGH甲子園 2017」開催！ 全国から84校が参加し、 情熱をかけた研究の成果を発表

2017年3月、関西学院大学において

「全国スーパーグローバルハイスクール課題研究発表会 2017 SGH 甲子園」が開催された。

全国のSGH校及びSGHアソシエイト校84校が参加し、

課題研究の成果をプレゼンテーションやポスターで発表した。

今回は、審査員や参観者の投票による審査が行われ、各校の発表は熱を帯びるものとなった。

大盛況のうちに幕を閉じた発表会の模様をレポートする。

**高校の研究発表会としては
日本最大規模のイベント**

2017年3月19日、阪神甲子園球場で春の選抜高校野球大会が開幕したその日に、兵庫県西宮市の関西学院大学において、「全国スーパーグローバルハイスクール課題研究発表会 2017 SGH甲子園」（以下、SGH甲子園）が開催された。16年3月に開かれた「第1回近畿地区スーパーグローバルハイスクール校・SGHアソシエイト校課題研究発表会」（参加校27校）が好評だったことを受け、今年度は規模を拡大。参加校を全国から募集したところ、84校約200チームの申し込みがあり、高校が参加する研究発表会としては日本最大規模のイベントとなった。

SGH甲子園は、文部科学省「大学入学者選抜改革推進委託事業（主体性等分野）」の一環でもある。同事業は、学力の3要素の「主体性等」をより適切に評価するための評価尺度・基準の開発と、その成果の普及などを目的としており、その指定大学には代表大学の関西学院大学のほか、8大学が名を連ねる。今年度は、「課題研究を通じて、学びに向かう力

を高校現場や大学入試でどのように評価するのか」という知見を得る試みとして、関西学院大学と指定大学の大阪大学、大阪教育大学、そして早稲田大学の大学教員が審査員として参加し、研究発表の評価を行って、上位チームを表彰することとした。

開会式では、関西学院大学の村田治学長が、発表に臨む高校生に次のようにエールを送った。

「今後20年間で、今ある職業の半数以上がなくなると言われ、生産年齢人口が減少するなど、社会環境は大きく変わっていきます。だからこそ、学び続ける力、問題を自ら発見する力、そして、社会や世界をどのように変えたいのか、自分自身の人生をどう生きていくのかという価値観、世界観を持つことが求められます。それらを身につけるための方法の一つが、皆さんが取り組んできた課題研究だと言えます。今日はこれまでの研究成果を存分に発揮してください」

25校がしのぎを削った プレゼンテーション

課題研究発表は、プレゼンテーションとポスター発表、3つのテーマを

討論するグループディスカッションで実施された。

プレゼンテーションには25校25チームが参加。持ち時間は1チーム30分間（うち10分間は審査員による質疑応答と講評）で、英語と日本語のいずれかで行われた。

英語プレゼンテーション部門で優秀賞を受賞した兵庫県・神戸市立葦合高校2年の吉井佳弥さんは、「Textile-Waste」と題し、衣服の安価なりサイクルに関する研究を発表（写真1）。その内容は、日本では年間約



プレゼンテーション 25校 25チーム参加



写真1 神戸市立葦合高校の吉井佳弥さんは、教室いっぱいの参観者と4人の審査員を前に、衣服の無駄を減らすことに焦点をあてたリメイクショップを提案。本校とスウェーデンの高校生、世界各国の人にアンケート調査を行うなどして、研究を進めた過程も発表した。

20億着の衣服が処分されるが、リサイクルされるのはそのうち約15%に過ぎず、廃棄量を減らすために新しい形態のリメイクショップを提案するというものだった。審査員からは「アンケートの結果をもっと活用すればよかった」「一番重要なポイントはどこかをはっきりさせた方がよかった」といった厳しい指摘もあったが、それも研究レベルの高さからくる、今後の期待の表れだったといえる。

「質疑応答では、自分でももう少しだと感じていた点を指摘され、慌ててしまいました。経済学の先生からはマーケティングについて、社会学の先生からは調査手法についてのアドバイスをいただいたので、今後、データを精査して研究を深め、将来はリメイクの考え方を社会に広く普及させる活動をしたと思っています」（吉井さん）

葦合高校のほかにも、塩分の低い「すんき漬け」に着目し、高血圧者の多いアメリカで普及させる方法を提案した兵庫県立伊丹高校、グローバル社会で活躍するための「高校生のためのルーブリック」を提案した京都府・京都市立堀川高校、世界の肥満問題の現状と解決策を提案した大阪府・私立高槻中学校・高校など、今日的な課題とユニークな着眼点を持った研究が発表された。

高校生らしい新鮮な発想が 垣間見えたポスター発表

77校209チームが参加したポスター発表では、1チームが10分間の発表と5分間の質疑応答を計4回行った。優秀賞は審査員と参観者の投票によって決まるが、参観者がどのポスターの発表に行くかは自由である

*プロフィールは2017年3月時点のものです

ため、各チームとも、より多くの人に見てもらおうと、自作のポスターや実験道具を活用しながら、身ぶり手ぶりを交え熱心に発表していた。

発表校の1つである茨城県立土浦第一高校Bチームは「簡易発電機を展覧途上国へ」と題し、電気普及率が低く、ゴミ問題を抱える、ハイチャミヤンマーといった国のために、ペットボトルや釘などの廃材から作製できる簡易発電機を提案した(写真2)。「テーマはすぐに決まりましたが、発電用のプロペラの強度と重量のバランスを取ることが難しく、実験段階で試行錯誤を繰り返しました。全国規模の発表会に参加するのは初めてでしたが、今日は発表を重ねるごとに、自分たちの表現がうまくなっていくのを実感しました」

また、ポスター部門優秀賞に選ばれた東京都・私立早稲田大学高等学院Bチームは、地方都市における多文化共生について、実際に滋賀県甲賀市に滞在して調査するなど、フィールドワークを重ね、ドイツの事例との比較研究を行った。

プレゼンテーションと同様に、ポスター発表でも専門的な質疑応答がなされており、生徒にとっては専門

写真2 茨城県立土浦第一高校Bチームは、廃材から作製できる簡易発電機を提案。実際に作った発電機を手に、実演をしながら発表した。

家の意見を聞けるまたとない機会になったと、プレゼンテーションチーム、ポスター発表3チームが参加した兵庫県・国立神戸大学附属中等教育学校の森田育司先生は語る。

「本校は、卒業研究として課題研究に取り組みますが、学外の方に見ていただく機会や他校の生徒との交流は実に貴重なものです。生徒たちは専門的なアドバイスや多様な意見に刺激を受け、新たな研究意欲が湧いてきたようです。他校の発表では、地域密着の身近なテーマから、海外研修で得た課題意識を発展させた

ポスター発表 77校 209チーム参加

写真3 石川県立金沢泉丘高校Bチームは、日本の食糧廃棄問題に着目し、消費者に届かない「規格外野菜」をビジネスに活用する方法を提案。

テーマまで幅広く、独自の切り口で研究されていたのが印象的でした。提案も大人には思いつかないような新鮮かつ大胆さに驚くとともに、わくわくさせられました」

表現力・協働性が問われたグループディスカッション

グループディスカッションは、3つのテーマが設定され、1テーマにつき6人のメンバーで、ディスカッション45分間、課題解決のプレゼンテーション10分間、講評5分間で行

われた。なお、ディスカッションの45分間では、冒頭に司会・書記・タイムキーパー・発表者など役割を迅速に決めることも求められた。

メンバーは事前に、各自の主張を400字程度にまとめて共有していたが、実際に会って話をするのはこの日が初めて。そのため、開始15分前に会場にメンバー全員が集まると、互いに積極的に声をかけ、冗談を言い合うなど、ディスカッションがしやすい雰囲気づくりに努めていた。

この日の3つめのテーマは、「日本における選挙権の18歳以上への引き下げについての課題と投票率を上げるための解決策について」。立ち見が出るほどの大勢の観客が見守る中、グループディスカッションが始まった(写真4)。メンバーは自己紹介を済ませると、1、2分間で役割分担を決め、議論に入った。

まず司会に促され、メンバー一人ひとりが、テーマに対する意見と、「学校で主権者教育やメディアリテラシー教育を徹底する」「海外の事例を紹介し、政治を身近に感じさせる」「住民票のない下宿先からも投票できる制度を整備する」などの解決策を提案した。その後、司会を中心にプレ

ゼンテーションに向けた課題解決策の絞り込みが行われた。政治参加への意識が高い若者には投票しやすい制度改革を実現すること、意識の低い若者に対しては選挙に対する教育を充実させ、SNSなどのソーシャルメディアを活用して政治を身近に感じさせることなどに集約した解決策について、発表者が10分間のプレゼンテーションを行い、グループディスカッションは終了した。講評では、「活発な議論の中に、各自の個性が生

きていた」と賛辞もあったが、「最後は議論が散発的だった」「課題の構造化がうまくいっていなかった」といった意見も出された。

ディスカッションに参加した北海道・私立札幌聖心女子学院中学校・高校2年の桐山晴はれさんはこう語る。

「同じ高校生でも、環境が異なり、学んできた内容が違っていると、議論の進め方や前提知識も違っていることが分かり、その中で皆が納得できる解決策を探すことの難しさを感じまし

写真4 6人のメンバーの出身地は、北海道、岐阜県、愛知県、京都府、岡山県、福岡県と異なり、この日が初対面。開始前のわずかな時間に交流し、ディスカッションに臨んだ。皆、ディスカッションの経験はあったが、初めて会った者同士で自分の意見を主張しつつも、1つの案にまとめる難しさを感じていたようだ。

た。そうした難しい議論の中でも、自分が持っている力を出し切れた充実感があり、1時間の中で自分が大きく成長できたと思います」

結果よりもプロセスが 大切となる課題研究

すべての発表が終わった後、ラウンジでは高校教員交流会、学生食堂では高校生交流会が行われた。教員交流会では主催者代表の大学教員を交えて歓談し、学生食堂では生徒たちが健闘をたたえ合った。発表した生徒たちは、研究を深める上でも、プレゼンテーション能力を高める上でも得るものが大きい1日となり、教師にとっても、普段とは異なる生徒の姿を見ることで、指導改善のヒントを得ることができたはずだ。

SGH指定校を目指す高校にとっても、得るところは大きかったようだ。兵庫県・私立神戸学院大学附属高校の森永武人たけひと先生はこう語った。

「本校は、『総合的な学習の時間』に課題研究を行って3年目になりました。私自身も、生徒の内発的な動機づけを研究テーマとしており、課題研究は学習や進路選択の意欲に直結

すると考えています。今日の発表では、SGH校の研究レベルの高さに驚かされるとともに、本校の生徒にもぜひ参加させたいという思いを強くしました。今日の成果を校内で共有し、申請に向けて準備を進めていきます」

閉会式では、早稲田大学理事の恩藏おんぞう直人教授の講評が行われた。

「今日の発表では、身の回りの課題や実際の経験から出発したテーマが多く、フィールドワークや実験など、実際に足を運んだり手を動かしたりすることで認識を深めている点が優れていると感じました。その一方で、調査対象の選択や分析方法などのリサーチ・デザインの甘さは、今後の改善ポイントでしょう。課題研究は、結果よりもプロセスが大切です。今日の経験は皆さんのこれからの人生にとって大きな財産になったということを十分認識してください」

その後、各賞の発表が行われ、学名校名が呼ばれる度に会場は大きな拍手に包まれた。最後はプレゼンテーション部門の最優秀賞を受賞した秋田県立秋田南高校、大阪府立千里高校によるエキシビジョンが行われてSGH甲子園は幕を閉じた。

*プロフィールは2017年3月時点のものです

2017年4月号・特集へのご意見

すべての根底にあるのは資質・能力の育成

「社会で活用できる資質・能力」は、学校内だけで獲得できるものではなく、学校教育の場が社会に広がり、そこで得た自信とともに社会に出るのが理想だと思う。「社会に開かれた教育課程」も、「よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創る」という目標を学校と社会が共有し、両者が協働して必要な資質・能力を育むと考えれば、学校教育の目標もイメージしやすい。学校に様々な分野の専門家しょうごへいを招聘して教育を推進し、生徒が学校外でも積極的に活動することが大切で、学校と社会の垣根を低くすることから始めたい。 徳島県 匿名希望

正解を創っていく姿勢が大切

「理数探究」の解説で、千葉県・私立渋谷教育学園幕張中学校・高校の岩田久道先生の「曖昧さや不確かさがあっても、事実を基に自分の頭を働かせて答えを追い求め

る」という言葉に共感した。これは、どの教科にもあてはまることだと思う。すべての条件が整って物事が進むことはほとんどない。不備があっても進めなければ社会は成り立たないし、矛盾をいくつも抱えているのが現実社会だ。その中でたくましく生きていくには、少々の不備を乗り越える力が必要であり、正解を創っていく姿勢が大切になるのだと思う。 埼玉県・私立大妻嵐山中学校・高校 久保島昌一

自校の強みから考える

本校でも、私を含めて課題意識はあるものの、何から着手すればよいか分からず、動けない状況だった。しかし、育成が求められている資質・能力は、これまでの学校教育で育成してきた力と異なる全く新しい力ではないという言葉に勇気をもたらえた。そして「自校の強みから教育改善に向けた方策を考えていけばよい」という言葉は、学校教育目標を振り返る際のヒントになった。誌面の図やポイントを活用しながら、少しずつチームになっていければと思った。 広島県立広島観音高校 長光優樹

教育 ちょこトーク



テーマ 2学期に向けて 夏季休業中に 取り組んでおきたいこと

- 2学期の授業内容について、教科書レベルではなく、専門的な概説書や新書を何冊か読みたい。 長野県
- 読書。生徒に語る内容が時代遅れになっているようなので、生徒が興味・関心のあることを知るため。 福井県
- スモールサイズの合宿を行って、生徒たちと熱く語り合いたい。 香川県
- まとまって時間が取れる時こそ教材研究。アクティブ・ラーニングのシナリオ作りをしたい。 広島県
- 専修免許取得研修に参加。これまでの実践を総括し、新たな知見を幅広く学んでいきたい。 静岡県

お詫びと訂正

『VIEW21』高校版2016年度10月号「指導変革の軌跡」で掲載いたしました福岡県・久留米市立南筑高校の記事につきまして、お詫びと訂正をいたします。同号の34ページにて学校改革に向かうに至った校内状況が、「一部の教師の問題行動や生徒の生活規律の乱れなどが原因で、地域からの信頼を失いつつあった」と、一部の教師や生徒の問題行動が起因とする表現になっておりました。しかし、当時の南筑高校には教職員組織についての課題があり、中でも学校総体としての部落問題に関する認識の不十分さから、教師が保護者に対し、差別文書を送りつけるという前代未聞の部落差別事件を引き起こしたことが、地域からの信頼を失う大きな要因となったとの旨、当該校より掲載内容の修正についての申し出がありました。このことから、本記事の掲載内容は、適切さを欠く表現であると判断致しました。ここに訂正をするとともに、誤解に導き、かつ、読者の皆さまにご不快の念を持たせる表現となりましたことを心よりお詫び申し上げます。今後、このようなことが二度と起きないよう『VIEW21』編集部としまして、細心の注意と配慮をしていく所存です。

『VIEW21』編集部 統括責任者 馬淵 直

編集後記

今号の「大学の学び 最新ナビ」のコーナーでご紹介した就実大学での取材を通して、多様な仕かけによって、主体的な学生が育っていると感じました。本記事で取り上げた長期インターンシップや海外留学のプログラムなど、学生が学びたくなる環境を整備することも、仕かけの1つだと思います。同大学には、写真のようなグループワーク用のスペースや自習用のカウンターテーブル、プレゼンテーション・ルームなどが設置されており、目的別に学生が学ぶ環境が整っていました。そこは、学生たちが自然と集まり、学びに向かう、まさに主体的な学びの空間になっているのだと感じました。(廣田)



VIEW21 高校版 2017 8 月号

次号は 8月21日発行 (予定)

『VIEW21』高校版は年6回の発行です

教師を育てた 言葉たち

No. 002

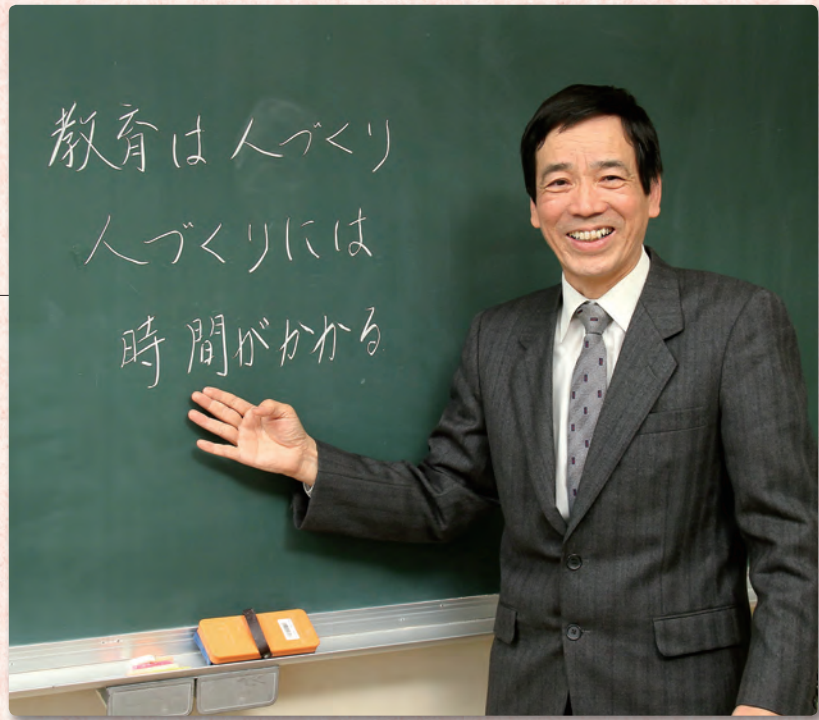
兵庫県立播磨農業高校

丸山正人先生

まるやま・まさと

◎教職歴 37 年。同校に赴任して 8 年目。
進路指導・人権教育部副部長。英語科。

兵庫県立播磨農業高校 全日制／農業経営科、園芸科、畜産科／共学／1 学年約 120 人／2017 年度進路実績（現役のみ）：進学は、高知大など 4 年制大 10 人、短大 2 人、大学校 7 人、専門学校 31 人。就職 58 人。



教 壇に立っているのに、生徒は誰一人教科書を出さずにこちらを凝視するだけ。教科書を出すように指示しても従わない。無言の静寂が私を孤独に追い込む……英語教師として初めて臨んだ授業は砂漠のような風景でした。今思えば、その異様な雰囲気も、若輩の私の手並みを試すたわいないものだったかもしれませんが、未熟な私にはどう対処すればよいか分かりませんでした。次の授業も、その次の授業もひたすら私を凝視するだけの生徒たちになすすべもなく、底なしの泥沼に陥落していく自分に嫌悪しました。その一方で「教壇に立つ以上は泣きごとは言えない」と力みばかりが増えて、次第に学校へ行くのがとてもつらく感じられるようになっていきました。

2 週間ほど経ったある日の職員室で、英語科の先輩に「しんどいことでもあるのか？」と声をかけられました。周囲を気にして「何もありません」と答える私を、先輩は「うちに来なさい」と自宅に招いてくれました。夕食をともにし、いろいろと話すうちに、私は教室での出来事も打ち明けていました。夜を徹して語り合う中で、先輩からもらった言葉が、教師としての私の根幹となった「**教育は人づくり。人づくりには時間がかかる**」でした。

「生徒は無視や反抗をしているわけではない。君の出方によっては君を受け入れようとしているのではないか」「英語が嫌いな自分たちとどう向き合ってくれるのかを問いかけているのだ」と先輩は話してくれました。確かに私は、生徒の英語学力を高めよう

という気持ちを強く持ち、英語を教えることが自分の存在意義なのだと思っていました。先輩は「成績を伸ばすのも大事だけれど、それは教育の一部であり、目先の成果なのかもしれない。目の前にいる生徒たちに必要なのは、もっと別のものではないだろうか」と私に問いかけました。

翌 日、出勤する私の心にはそれまでにはなかった余裕が生まれていました。いつものように教科書に目もくれず私の顔を見つめる生徒たちに、「僕の顔に何かついているかなあ？」と初めて笑顔で返したところ、教室に笑いが起きたのです。それは、ちっぽけな変化ですが、「生徒に合わせて授業をしよう」と私が決意する大きなきっかけになりました。初任校は専門高校だったため、授業の導入で専攻に関連する英語を教えるようにしたのもその 1 つです。そうした私の変化に応じるように、生徒も少しずつ集中して授業に臨むようになりました。生徒が必要とする学びのあり方を教師が理解し、実践すれば、生徒は学びの意欲を持ち、学習への取り組みの姿勢も変化することを、私は生徒から学びました。

今日まで私は、様々な学校で様々な生徒と出会ってきました。英語が苦手な生徒が突然「先生、教えて！」と言ってきたり、卒業生が「先生のあのひと言で人生が変わった」と告白してきたり……自分とは違う人生を生徒を通して生きている、そんな感動を覚える瞬間が何度もありました。「教育は人づくり」という言葉には、生徒が教師である私を育ててくれるという意味もあるのだと思います。

キモチだけは、 誰にも負けない。

ベネッセ海外留学センター

海外進学奨学金

返済
不要

100万円
1名に給付

200万円
1名に給付

50万円
1名に給付

募集人数
計3名

WEBから資料請求してみよう! ベネッセ 奨学金 検索

<http://www.benesse-kaigai.com/shingaku/shogakukin>

応募締切 | 2017年9月30日土 当日消印有効

ベネッセ海外留学フェア開催!

大阪 11月18日@ / 東京 11月19日@

詳しくはWEBで確認 留学フェア ベネッセ 検索

VIEW21

ビュー21 高校版 Volume 2 2017年6月号
2017年6月23日発行/通巻第364号 発行人 山崎昌樹 編集人 春名啓紀 発行所 (株)ベネッセコーポレーション ベネッセ教育総合研究所
VIEW21編集部 〒163-0411 東京都新宿区西新宿2-1-1 新宿三井ビルディング13階
© Benesse Corporation 2017

お客様
サービスセンター

[フリーダイヤル] 0120-350455

受付時間 月～金 8:00～19:00 / 土 8:00～17:00 (祝日・年末・年始を除く)

株式会社ベネッセコーポレーション岡山本社 〒700-8686 岡山市北区南方3-7-17